

# 第12回銀華文学賞発表

## 銀華文学賞

### 最優秀賞

#### 「最後の帰郷」

西山慶尚

(愛媛県新居浜市)

#### 「向日葵」

森本あさ子

(愛知県豊橋市)



しばらくお休みしておりました銀華文学賞を、二〇一九年、四年振りに再開させていただきました。長い中断にもかかわらず、日本全国より二〇九篇の多数の御応募をいただきました。厚く御礼申し上げます。

予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

誌面の都合により、奨励賞などの作品は次号以降に順次掲載させていただきます。第十二回銀華文学賞授賞式・祝賀会は、申し訳ございませんが今年も省略させていただきます、賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきます。御了承ください。なお銀華文学賞は明年、年齢を四十歳からに繰り下げさせていただきます、四十歳未満の方は文芸思潮新人賞を設けて、新たに募集する予定です。どうぞまた奮って御応募ください。お待ちしております。

### 優秀賞

#### 「再出発」

内田東良

(東京都世田谷区)

#### 「銀色の虫」

土田ひろし

(静岡県沼津市)

#### 「クチボソ暮色」

井上一志

(東京都八王子市)

#### 「キム・ジョンウン先生、

革命の日は近いようです。」

倉木基志

(宮城県仙台市)

### 奨励賞

#### 「いいね！」

牧 康子

(東京都杉並区)

#### 「檸檬の木のある風景画」

しのぶ憂一

(静岡県伊東市)

#### 「幻想家族」

辻本哲次

(福岡県田川郡)

#### 「鬻ひやく」

大新健一郎

(兵庫県西宮市)



銀華文学賞優秀賞メダル

佳作

- 「二分」 高岡啓次郎
- 「一九七一年・雨空の花火」 立野幸雄
- 「新しい道」 森千恵子
- 「一粒の涙」 近藤幹夫
- 「那覇離愁」 山本憲明
- 「撃竹」 西田信博
- 「雨、嫌いやねん」 椿山 滋
- 「一九六五 夏」 藤井典央
- 「別れのかたち（キンズの根）」 大江純子
- 「老春の余韻」 路夢
- 「あじあ号の時代」 朝川 彪
- 「懐かしい足音」 梶川洋一郎
- 「もすけ」 坂口保典
- 「くしやみ」 阿部千明

「バージンロード」

是田一作

「村岡はぼくに」

河野つとむ

「明日への帰還」

勢 隆二

「トカゲの頭切り」

竹中 寛

「オールドローズ荘」

枝 道子

「刹那」

樽井弘志

「ある男の物語」

上野雄三

「今井秀二の手記 暗路」

田中 豊

歴史小説賞佳作

- 「血と土と——豊後杵築藩農民一揆始末——」 笠置英昭
- 「南部の老臣」 久保協一

在日の優れた小説

大高雅博



今回は下読みの段階から、全体にレベルが上がっていることが感じられた。それは裏返せば、同じようなレベルの作品が多く集まってきたに在る事になる。選別は難しくある境を突破するための算段が書き手には必要となってくる。

今日のな題材も多く見られるが、単に題材だけでは、上には残れない。

さて、僕が最も興味を引かれたのは、優秀賞に選ばれた倉木基志氏の「キム・ジョンウン先生、革命の日は近いよ

うです」。在日について考えるときにジル・ドゥルーズが言ったマイナー文学という言葉を出す。これは、完全な裏め言葉なのだが、自国語ではなく「別の国の言葉で」小説を書いた人々を指す。その代表がカフカである（自国のチェコ語ではなく、ドイツ語で書いた）。そのほかにマン

河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は二〇一五年より、銀華文学賞からまほろば賞の中に移され、同人雑誌掲載の小説作品を対象にし、まほろば賞選考会において同時に選考され、決定されることとなりました。

受賞者には賞状、賞品、賞金五万円がまほろば賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



ドルーズはマゾッホも高く評価しているが、一般的にはカフカであり、直接的、間接的に関わらず後世の小説家に与えた影響は、計り知れない。カフカはドイツ語で書かざるを得なかったのだ。そこにすでに、小説的世界が成立する。在日の作家こそマイナー文学そのものである。李恢成という在日の作家がいる。「見果てぬ夢」という長編は本当に素晴らしい作品である。話は大きくされるが、大江健三郎氏がノーベル文学賞を取ったとき、次に日本で、受賞しそうな人をと考えたとき、浮かんできたのが李恢成であった。今でもその考えには変わりはない。村上春樹氏の前に李さんだと思ふ。ただし、残念なことに翻訳が出ていないようだ。ただ、在日の李さんが、古井由吉、大江健三郎とともに日本の文壇のトップを歩まれていることは不思議だが間違いない。

在日に対して、差別、偏見、ヘイトスピーチのようなものが、現実にはあるのだろう。この小説はそれを逆手にとって、喜劇としている。母親が亡くなる間際に言った韓国語がわからない。結婚式に日本名で、出席してほしいと頼まれ、思い悩む。喜劇は当事者達が、真面目に悩めば悩むほど、面白くなる。ただし、そこまでだと、今までもあつたかもしれない。

ヘイトスピーチというのは、陰に隠れて、弱者に対して一方的に暴言を吐くということで、卑怯な行為で、この国の前身でもある。現代の自爆テロは日本の特攻が原型だという話がある。日本軍の特攻はほとんど成果を上げられず、今から考えると、全く無謀だと思われるが、時代が狂気となっていたのだろう。戦争に現実にかれた世代はすでに多くが亡くなっているだろう。作者のように、おそらく微かな記憶が在る人々も少なくなっているだろう。だからこそ、こういう小説は必要なのだ。優秀作土田ひろし氏「銀色の虫」は、ほげが始まった老人の話であるが、二階から、下の商店街を見て、歩く老人から昔を思い出す。面白い趣向だと思う。健さんという昔なじみが工事現場に入っていくのを見るが、そこにはいない。現実とほげが混ざっていく。興味深い小説である。

優秀作内田東良氏「再出発」リタイアして、離婚した男の話だが、孤島に一軒家を買って住むというのが目新しい。入院をするときに保証人がいなくてという話も面白い。奨励賞の辻本哲次氏の「幻想家族」は、義父からの性的虐待と、それを裁判で認めさせるまでの話で、今日的な題材でまとまりもあり、もっと上でも良いかと考えたが、選者の一人から異論がだされた。現実起こったことと、小説との関係の問題だと思ふ。

奨励賞のしづま一氏の「檸檬の木のある風景画」主人公は、最初から最後まで、契約社員である常勤講師であり、定年退職して三年になる、家にいる父親は半身不随で認知

の歪みがあるのだろうが、例えば、都心部の居酒屋、コンビニでは、日本語の上手な外国人が働き、彼らなしでは動かない現状がある。これからもどんどん増えていくだろう。内政が行き詰まっているときに、政治家は、外国に目を向けさせようとする。昔も今も韓国、北朝鮮、中国である。政治家が選挙のためにそれらを煽る訳だ。日本の島根県と呼ばれるような、狭い偏屈な感覚で、ヘイトスピーチのような馬鹿げたことをやっているこの国で、当事者にとっては大変だが、チマチマした問題にかかずらわっている間に、時代は根本的なパラダイムの変化が起きているのだ。この小説では最後に結婚式となるが、それが女性同士の結婚式なのだ。これは示唆に富んだ優れた小説である。

当選作の森本あさ子氏の「向日葵」は交通事故と思われる事故により損傷を受け、病院に入院しているのだが、水も飲めない、眠れない、そして、一日中続く痛み、その痛みを、読者は感じるだろう。その文章力だけでも、十分に当選作の価値はある。だが、現実として閉塞し始めているこの国においては、その苦しみを超える何か欲しかったとは思ふ。当選作西山慶尚氏の「最後の帰郷」は、しっかりと文章で書かれている。マリアナ沖海戦あ号作戦前の長兄が、帰郷する話であるが、無論家族にはそんな話はない。ただ、どこかに向けたいどうしようもない気持ちがある。まだ二十歳にもなっていない若者なのだ。零戦の爆撃は特攻

症である、妻は介護に耐えきれず、別居している。子供達が良い企業に就職ができ独立している。貧困の家系を終わらせるために援助を受けない。彼は町を歩く、さまよっている。日本の理想憲法の文言が出てきているが、現実には余りかけ離れている。自分を証明できるものを全く持っていない。不審がられた警察にも本名を言わない。最後に、彼が死ぬつもりで歩いていることがわかる。死んでも、寝たきりの父親がいるわけで、何の解決にもならないのだけれど、この人の文体に、迫力を感じた。

賞には届かなかったが、路夢氏の「老春の余韻」は面白かった。リタイアした老人ものであるが、町の色々な問題を解決していくという前向きな姿勢が良かった。こういう前向きな話は珍しく積極的に押したのだが、残念な事にエッセイではないか、それを並べただけで、小説になっていないとの指摘があり、残念ながら、それは当たっている。まだ、良い素材の段階なのだ。ここから、小説化するのが大変なのだけれど、もう、一度、考えて見られてはどうだろうか。

銀華文学賞は、多くの小説を書きたいという人々の圧力があつて復活したと思うが、当然ながら、まだ書くべきものはあるし、まだ、見えていないものもある。お互い、頑張りましょう。

## シルバー世代の特権

## 五十嵐 勉



四年お休みをした銀華文学賞で、再開してどのような作品が集まってくるのか、不安と期待が入り混じった心境だった。蓋を開けてみて、心配していたほどではないことに、少しほっとした。レベルの高いものがそれなりに集まっていたからである。ただ、題材があまりに高齢者の領域に偏り過ぎているのは、不満だった。四十五歳以上（次回からは四十歳以上）と言っても、題材がすべてその年齢以上の高齢に限定しているわけではない。むしろ晩年近くになって、若い頃のことを思い出し、その熱い活動や苦悩を振り返って、それを記し、その意味を問おうとして書く立場があつていいだろう。その領域を題材にしたものが少なかった。シルバー世代の特権として、経験世界が豊かであるということ、人生を振り返る叡智が深くなっていることが挙げられる。先の短いことを悲観的に考えること以上に、過去の豊かさを再現し、新たな意味付けをすることも重要なのではないか。数十年を隔ててや

つと理解でき、その意味がわかることも少なくない。その特権を積極的に生かしてもらいたい。それも銀華文学賞の役割の一つであると思っている。

今回最優秀賞に選ばれた二つの作品にはそれがあつた。一つは西山慶尚氏の「最後の帰郷」であり、もう一つは森本あさ子氏の「向日葵」である。

「最後の帰郷」は、マリアナ沖海戦に出撃して戦死した兄の文字通り最後の帰郷を書いた作品で、許された四日間のことを細かく記してあるのだが、自分の死を予感して、いつまでも夕暮れの中を子供の頃の思い出に浸って木馬遊びをする情景は胸を打たれる。兄は零戦を爆撃もできるものに改造した「爆戦」に乗って出撃し、最期を遂げるのだが、その前に自分の家の上を飛行するシーンも感動的である。少し調べてみると、零戦を爆撃機として使う着想は一九四七年にはもうあつたようで、その訓練を積んだ部隊がマリアナ沖海戦には出撃している。これがさらに変わって戦局の悪化によって「特攻」となっていくのだが、その意味で「爆戦」は「特攻」の前身とも言える。西山氏はまほろば賞などで、一貫して「特攻」をテーマに追い続け、時代錯誤という批判を受けながらも、ひるまず筆を貫き通した。その原点には、この体験があるということ、深く納得させられる作品である。同時にこれは御自身が長く大事にし、暖めてきた題材であることを受け止めずにはい

## 入選

- |             |        |
|-------------|--------|
| 「ねえちゃん」     | 安部としき  |
| 「罫箋と蝶」      | 井本元義   |
| 「最後の敵」      | 南 理維   |
| 「二枚の絵」      | 山崎人功   |
| 「天秤」        | 本田奈緒美  |
| 「別れの理由」     | 松井 憲   |
| 「びーの約束」     | ほそやまこと |
| 「蜘蛛の網」      | 鷺津 勇   |
| 「さよならホームラン」 | 内村今日平  |
| 「紫陽花はつなぐ」   | 安保美智子  |
| 「無題」        | 足立京子   |

※今回も力のある作品が多かったため、入選として賞揚させていただきます。

られなかった。この作品には敬意を表したい。

「向日葵」は象徴性の高い作品である。少女時代の瀕死の大怪我の記憶を患者の意識から描いていて、生死の間を彷徨う危うい感覚が、人生全体を暗示する、その奥を蔵した匂いがいい。筆者の森本あさ子氏の実人生も、かなり深いようで、その一般的幸福からは遠い嘆息の深さが、そのまま作品の音色として響いている。これは人生を回顧するその段階になって初めて書けるものかもしれない。「ひまわりの群像」が目の前をぞろぞろ歩いていくという病の中の透視は、日向を歩いていくクラスメートたちの幻像以上に、一般社会の人たちとの乖離かいりを表して、象徴として尖鋭に迫ってくる。「あるとき死んでいたほうがよかった」という述懐は、「人生は生きるに値するか」という問いかけにも反響して、いつまでも鳴り響いてくる。この後にもまだいろいろ書きたいものがありそうな、潜在力を有した作家を祝福したい。

優秀賞作品は、全体に老年の哀切を訴えるものが多く、それなりにおもしろいのだが、それに偏り過ぎていいる面が、やや目立った。

井上一志氏の「クチボソ暮色」は子供のいない老年夫婦が、行末を案じつつ、水生物館などを散策しながら夫婦の軋轢あつれを逆に伴として確かめていくきめ細かな心理が揺れている。夫婦間の揺れに味のよさがある。ただ、子供がいな



いことが、現在ではそれほど深刻なマイナス要素としては考えられていない見方もあるので、その点が先行きの短かさの切迫性を、やや削いでいた。

内田東良氏の「再出発」は、離婚した老年の男の一人暮らしを描いて、その日常と心境を生き生きと書いている筆致は、鮮やかである。病院での検査の不安や、クラス会のことなど、この年齢での世界は立ち上がっている。最後に不通になっていた娘からのメールと励ましを得て、安堵するストーリーは、平凡と言えれば平凡だが、どこかにほっと救われる気が湧き起こるのは、筆者の底に流れる温かさかもしれない。むしろそれを汲み取るべきとも思える。

土田ひろし氏の「銀色の虫」は、老年の問題にさらに尖鋭に切り込んでいて、認知症に浸食されていく意識を鮮やかに描いている。記憶が曖昧になって怖さを、鮮烈に突き付けてくる。意識と記憶が時間の配列を失いつつ壊れていく恐怖は説得力がある。日常の意識が漸次壊れていく過程はこのようなものかもしれない、という共感はずいぶん、何かもう一つ目新しい視点もほしい気がした。

「キム・ジョンウン先生、革命の日は近いようです。」は、これだけ老年とは離れた世界である。在日朝鮮人家族をリアルに浮かび上がらせて、おもしろい躍動がある。冠婚葬祭に絡んで夫婦の姓の問題まで、様々な問題を抱えつつ日本で生きていく生活の一面がよく浮かび上がってくる。し

プに乗り込んで行って、自分もそれに加わりたいとする結末は、露骨すぎて味消しになっている。それよりも安楽死のような領域を加えていったほうが、奥行きが増しただろう。結末が醜悪の方向に流れたのが惜しまれる。タイトルも凝り過ぎで、もつとわかりやすくても匂いの深い言葉がこの題材には合うと思われる。

佳作にもいいものがあつた。「撃竹」(西田信博)は仏教の悟りへの道程を描いていて、完成度は高い。文章も緊密で、最後まで隙なく読ませる。ただ、あまりに宗教の内的世界のドラマに終始しているのが、社会的、人間的な広がり欠ける。技量の高さは唸らせるものの、一つの領域に限られ、完結している点で、宗教の外に出てこない恨みがあつて惜しく思った。

「新しい道」(森千恵子)は、耳の病気の手術から始まって、図書館通いを通じて、そこで知り合った人から手話など新世界を教えられながら、老いを明るく前向きに受け入れていくストーリーは好感が持てるが、小説としてはもつと起伏がほしい。

「くしゃみ」(阿部千明)は、「くしゃみをされると記憶が飛んでしまう」という発想がユニークで、おもしろく読み進めていけるのだが、だんだん話がくしゃみから遠のいていく展開がもの足りなかつた。せつかくの着眼をもつと認知症とかに逆効果があるような方向で、生かしていけば好

かも自分のそれが北朝鮮の指導者と同じ発音であることに、皮肉がある。在日朝鮮人の家庭を名古屋弁に乗せて軽妙に描いたその筆は、特筆すべき迫真性があるものの、ややわかりにくく、振動の大きさが邪魔になった。この会話体、この文体で書かざるを得ず、喜劇にするしかないのだろうが、これによって逆に、何か逃げていくものがあるような気もする。それは今後の課題となるだろう。

題材のインパクトでは、奨励賞のほうが強いものがある。「幻想家族」(辻本哲次)は義父からの性的虐待を取り上げていて、児童相談所の手続きや運びなどリアリティがある。この領域は男女間の内側の心理も絡んでくるので難しい面があるが、よく公的な立場を徹底してその客観性から踏み外さずに書いているので、事件そのものをよく伝えてくる。しかし逆にそのために、善と悪とを切り分けなければならず、社会派の筆致で完結してしまっている点に、陰影の浅さが目につく。やむをえない処置であるとは思いますが、その限界を有しつつ、まとまった作品になっている。私としては、こちらのほうが優秀賞に近いかとも思った。タイトルはもう一つピタリしていない。

「霧」(大新健一郎)は、老人売春を扱っている。老人の性をテーマにして、ここまで正面から切り込んだ小説は珍しく、興味深いし、また筆運びもしっかりしていて、かなりの技量を感じさせるが、最後に自分も老女の売春グルー

短編になっただろう。

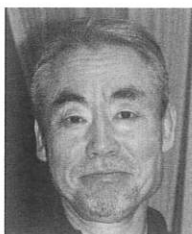
「懐かしい足音」(梶川洋一郎)は、警察の異動の季節から始まり、署長に栄転した主人公を通しての、警察内部が詳しく描かれるが、途中から「運ちゃん」と呼ばれる昔の同僚の話に中心が移っていく。姉がやぐざに騙されて輪姦の後転落し廃人になって死んでいったその復讐を果たすために密かに警察人となったという動機からしてユニークで、こちらの人物像がおもしろく、ストーリーがそちらへ吸い寄せられていく。結局題材の採り方に不適があつたようだが、「運ちゃん」を正面から書いた方が小説としてしっかり成立した観が否めない。主軸を「運ちゃん」において濃く書き直すといい作品になりそうな気がする。

「一粒の涙」(近藤幹夫)には、織物零細工場の悲哀が深く描かれていて、時代の変遷の陰に沈む人の思いが、よく綴られている。慣れ親しんだ織り機が解体されて運び去られるとき、それへの愛着が一粒の涙となることは納得できるが、それが小説のタイトルそのものになるということには、ズレがある気がする。むしろ「織り機」とかいう題のほうがよかつたかもしれない。

長い人生を振り返ると、遺すべきこと、書き記しておかなければならないことはいろいろあると思う。表現を鍛えて、真に光を与えて永い命を残すことは、意味のあることだと信じている。

## 復活の手応え

## 八寛正大



今夏も、猛暑酷暑、朝起きるとまた猛暑と、ダメ押しのように暑かった。秋も短く冬も年を越して二月あたり結構極寒になる。春はすぐさま花粉に襲来され、日本の気候に穏やかな四季は消え、尖った夏と凹んだ

冬の間で、辛うじて初夏辺りだけが生彩を残している感じだ……マスコミ、そしてスマホに侵食され、その味わい、機微、香りや暖かみといった「言葉のもつ中枢神経への寄り沿いと機能」が失われつつある昨今、季節と言葉は内外で繋がっているかのように思えたりする。

さて、しばしの休止を経てこの賞が復活したことは、実に喜ばしいことである。四十五歳以上の応募基準が四十歳以上となり少し若返ったが、上限はない。過去の経歴をどれだけ掘り起こせるかという、「記憶想起力」「メタ認知力」などこれからの高齢化社会に大きく望まれるものではないか。還暦までの人生に対し、そこから終焉までの二周目の人生こそ、「言葉」を駆使して豊かに生き、創り直せる人

れる。

当選作「最後の帰郷」

太平洋戦争で亡くなった兄へのレクイエムの作品である。三部に分かれていて、特に臨場感のある回想的な一が読めた。兄は十七歳で予科練を志願し、当時の海軍航空隊に入隊。そして一年ぶりに故郷に帰って来た時の話である。出迎える家族の何とも言えない待ち受ける姿勢のエピソード、一時帰還した《兄の身体からは、今まで嗅いだことのない微かな匂いが漂ってきた。昔の兄の匂いではない……これが海軍の匂いなのだろうか》という表現。取っておかれた熟しすぎた柿を兄が食べる所、そして戦闘爆撃機としてのゼロ戦に乗った空からの光景の話、銃剣術大会の快挙、思い出の木馬に乗った時のこと……死を覚悟しつつ、故郷に帰った命の瞬間の輝きが美しくも切ない。

視点の変化、二の資料的な羅列などはあるものの、戦後七十年さらに半ばまで来た現在、元号も変わったこの年にこのような瑞々しい記憶が残されていることは感動に値すると思う。

優秀作「銀色の虫」

朝からずっと、ベッドの上で窓外を見ている老人。それが現在と過去の回想を混ぜながら、なかなか良く描けている。それを象徴する言葉が良い。《その戸惑いは、「ああッ」や「馬鹿だった」というセリフを伴う、意識の過去への跳

生ではないか。そこに人間の智慧が問われるのではないか。もう一つ理屈を述べておきたい。「個」と「集団」（その大小に関わらず）という二つの属性の中で生きる人間は、その視点を二つ持たざるを得ないと思う。一つは、身体も含めた「集団の中の己」として。もう一つは個として全て己の脳に収めた「己の中の集団」としてだ。「選者の中の己」と「己の中の選評」。文学は、後者だけ……などと言うのは幻想で、実はそのバランスで結果は決まっていってしまうのだ、という事実を踏まえておきたい。つまり結果と己の選評とは一致していない部分が多々あるということでもある（笑）。

当選作「向日葵」

出だしが、なかなか鮮烈な感じだ。何かの手術が終わった後、そこから少しずつ世界が広がりが直していく描写、癒えて行く主人公……病院の内部なども良く描かれている。食べることでできない少女に母親が気を使い隠れて食べるシーンなど臨場感がある。つまり事故で内臓を痛め死の境を彷徨った状況の描写は評価に値する。その意味で文学として成立した作品ではあると思う。ただ、終わり近く、五十年が過ぎた今——が、よく伝わって来ない。さまざまな問題に攻め立てられたというのは、具体的にどんなことだったのだろうか。それがどれだけ「その後」の描写として描かれるか、説得力をもつか、難しい所ではあると思わ

躍のときと同じように、銀の虫たちの出現に繋がっていた」と。そして知人が小さな穴から入っていき出て来ないということに訴えるのだが、信じてもらえない悔しさで終わる。記憶を想起する切っ掛けは、かの偉大な文豪の専売特許ではない。

優秀作「クチボソ暮色」

深い小説だ。何か心理描写を旨とした、かつてのフランス映画を観るような感覚だった。子どももない、共に仕事も辞めた黄昏の夫婦、彼らが水族館を散策する中で心理描写。幼児連れの家族との関わりがちよっとしたドラマとなつて臨場感を感じさせる。かなり質の高い文学とは思われる、と共に状況に共感していくにはどこか特異なシチュエーションのような気もした。

優秀作「再出発」

六十歳の定年を機に妻と分かれて孤島に住んだ男の話。クラス会などもあり、《みんな思いのたけを言い合うと元気になるのだ。明日のパワーが湧いてくる》というところなど、実感をもって賛同できる。身寄りのなくなった主人公に、かつての同級生の女性がすんなり保証人になってくれる。破綻のない、明るい「ある老年」を描いた良作である。優秀作「キム・ジョンウン先生、革命の日は近いようです」

筆力は認められる作品。祖母の死や、大学での講義のころなど今的な感覚は伝わり、発音すると主人公の名前は

「キム・ジョンウン」となること、ラストの女性同士の結婚式など、飛んでいる感はある。喜劇的、風刺的？ な感覚もありそうだが、現実の世界情勢との対比の中では読み切れなかった。

奨励賞「檸檬の木のある風景画」

老年のアイデンティティの追求と言える小説。妻と別居に同意し、《私は、私であることを証明するものを何一つ身に着けていない》と気づく。また知人の個展で、《あえて果実を描き入れなかった画家の意図を明確に理解する》と。ラストは生きる意味を失い自殺を仄めかし衝撃的ではあるのだが、少し「振り」の臭いもした。

奨励賞「鬻」

これは面白い、どこかミステリアスな感覚のある小説だった。鬻ぐという言葉も久しぶりに触れた。ラストラされ清掃会社の契約社員になった主人公。特別養護老人ホームでの勤務。そこで出逢った傾聴ボランティアと思われた高齢の女性たちは、ある意味、入居老人向けの売春組織の人たちだった。主人公は割の良いその仕事に男性として加わろうとし、老女たちに試されるようにのしかかられる……。そのラストがどこかボルノチックになってしまい、惜しかった。発想も面白く読ませるものではあったが、もう一つ人間の命に触れる所までを読みたかった。

奨励賞「幻想家族」

作品だ。夕刊スポーツの営業局へ入社したほとと村岡、その二人が黒木綾香という憧れの女性記者を挟んで（といっても交流は少ないが）、様々な社内での出来事に遭遇する。また村岡の敬愛する吉田松陰のことが描かれ、ラスト、三様の人生の到達点が描かれる。文にちよつとタブリがあり、構成は必ずしも斬新とはいえないが、でも読ませた。人はみなそれぞれに、「己が属した青春」を持ち、それを「己の中の青春」として回想する。

「ロング・グッドバイ」

小さい頃やけどをし、そのコンプレックスを持つ男性の話。山男となり、凍傷で指も失ったりする。だが後半、親の介護に奔走することになる。シチュエーションは面白く、なかなか良く描けているとは思われつつ、時代考証のような個所は取って付けた感もあり、小説の構成を再考されることかと。

「ねえちゃん」

《僕には母が二人いたようなものである》と、この言葉に象徴されるように、歳の離れた主人公を慈しんでくれた、今や二人だけになってしまった老いた姉への渾身の思いが伝わって来る。特に、義兄と三人の時の会話、「姉ちゃんはなんで大浦小町とか言われとると？」と無邪気に僕が言うシーンなど秀逸。

「今井秀二の手記 暗路」

義父から性的虐待を受けた中三女子を取り巻く話。実録的な意味はあると思われるし、適度にそれは良く描かれている。しかし、ラストの母親の善人への変身はリアリティがない。小説としてはまだ未完成と感じられる。

奨励賞「いいね！」

退職後の男性がSNSで昔の女性と少し関係が蘇ったりするが、交通事故なども経て、今の妻を見直す話。

他に印象に残った作品。

「那覇離愁」

旅行会社の男性が主人公。沖縄那覇に単身赴任し、遊ぶぞうと力んだものの、翻弄される話。その時期の沖縄が良く描けている。国際通り、激戦地、教育……。《沖縄にいたる思いで来てみたら天国であった》。そして遊ぼうと思つた相手が男の子を連れてやってきた……。ラストが良い。この主人公、ひいては作者の人生の、ある高揚した時代を見事に回想し描けている。選評会では、沖縄、台湾、その他現地をもつと深く描いてきたものはある……。という意見があった。しかし、比較ではないと思う。この作者にとつて、この小説を書き切つた意味は大きく、また時代も主人公と共にあつたのだ。

「村岡はほくに」

これも作者にとつて大きな意味があつたのではと思える

かつて郷党の秀才と言われつつ自死した？ 兄のことが淡々と描かれている。レクイエムとさえ言えないほどの暗さ、追いつめられていく兄やその父親との関係、その他……。これも文学だからこそ、描けたのかもしれない。

「最後の敵」

秀吉の一生。数多書かれてきたものをなぜ？ と思いつつ、文の整つた流れが美しいと感じられた。秀吉の信長を観る目と、市へ溺れなかつた抑制のところが読めた。

「ビーの約束」

享年十八歳まで生きた愛犬への思いに貫かれている。

「血と土と」

豊後（大分県）のかつてあつた一揆のことが迫力をもつて描かれている。

「くしゃみ」

ちよつと謎めいた感はあるが、認知症が進んでいく女性の側からの周囲・関係への関わりを鋭い感覚で描いている。

「春夫さんの花火」

ハンセン病の主人公とその取材に来た女性記者との関わり。

言葉を介して作者たちが思いを込め、身を削つて描いた小説の数々にこうして出逢えた。そこに費やされた《膨大な時間》に敬意を表しつつ筆をおきたい。



## 選考を終えて

## 小浜清志



人は何故小説を書くのだろう。私は演劇にのめり込んでいた頃いつも言葉に打ちのめされていた。自らのイメージを役者に伝えるために言葉を使うしかないが、その言葉は比喩や暗喩にとどまり、うまく伝わらない苛立ちをいつも持っていた。それは自らの言葉使いの挫折となり、演劇を去った記憶がある。イメージが明確になつていなかったかもしれない。それを伝える言葉が稚拙であつたかもしれないが、大きな傷として今も残っている。演劇を辞めて十余年で新人賞をとれたのは自らの描くイメージをどれだけ文字化できるかを悩んできた結果だと思う。人間は誰もいろいろと想像することができる。しかし、その想像をどう表現するかが小説の世界でも重要なことの一つであろう。

今回の応募作を読んでみて、表現の方法に工夫が足りない作品が多かつたと思えてならない。中村淳一「春夫さんの花火」においても、重いテーマを扱っていながら話がありまらにも平板になりすぎている。着眼点の良さを生かしき

れなかつた。

南理維「最後の敵」、歴史とは変えることのない事実であるのだが、これを小説という形に入れるためにはかなりの計算が必要で、且つ作者の洞察力に負うものが大きいだろう。そうでなければ読者を納得させることはできない。

牧康子「いいね!」、定年後の過ごし方をベースにした軽妙な筆づかいは好感はもてるが、作者が楽しんでるよううで読み手は置き去りにされている。

山本憲明「那覇離愁」、沖縄の僻地出身である私は那覇をあまり知らないのであるが、沖縄県民の歩き方、息のかたという癖をしっかりと見抜いていると思つた。しかし、表面を撫でるのではなく男と女の愛憎から見える沖縄を描いて欲しかつた。

笠置英昭「血と土と―豊後杵築藩農民一揆始末―」、確かな筆力で物語の中へ引き込む力強さは圧倒的である。床下から情報を得て一揆へと進み、集団のもつ破壊力をまざまざと見せつける描写も素晴らしいが、人間の形は見えても人間そのものが見えてこない不満が残つた。

勢隆二「明日への帰還」、敗戦を迎え台湾から帰還する話であるが、父も母も亡くしまだ幼い兄弟の面倒をみながら懸命に生きる主人公の姿が美しい。作者の人間に対する眼差しが優しい。ただ戦争とは人間性をも歪めてしまう状況も生み出してしまうことをどこかで触れたなら、もつと

奥行きがでたと思うが、読後感もよくいい作品だつた。

田中豊「今井秀二の手記 暗路」、優秀な兄を持つ弟の手記である。血のもつ狂気が兄にも乗り移つたのか、ひきこもりがちになつていく姿から、いつか惨事を起こすのではないかと不安を抱く。兄が出奔し白骨となり発見される状況描写は息を呑んだ。しかし疑問が浮かぶ。兄が目指していた場所に父も向かつていたのではないか。血のもつ狂気を父がたち切つたのか。読者の想像を膨らます。

大新健一郎「霧」、ひさぐとという難しい漢字のタイトルになんとなく思い描いていた事は現れず、ミステリアスな老人や担当の言動がにつき核心に迫ってくる。最後はドタバタ劇のようになつてしまふが、老人の性へのアプローチは間違っていないだろう。

井上一志「クチボソ暮色」を私は当選作にしようと思つていたが、意外に点数が伸びなかつた。老夫婦の来し方を近所の公園を散歩しながら振り返るというありきたりな話であるが、私は行間に詰まっている積年の情念に作者の筆力を感じた。他人の子供を勝手にあやす場面に工夫があれば、より一層傑作になつていただろう。

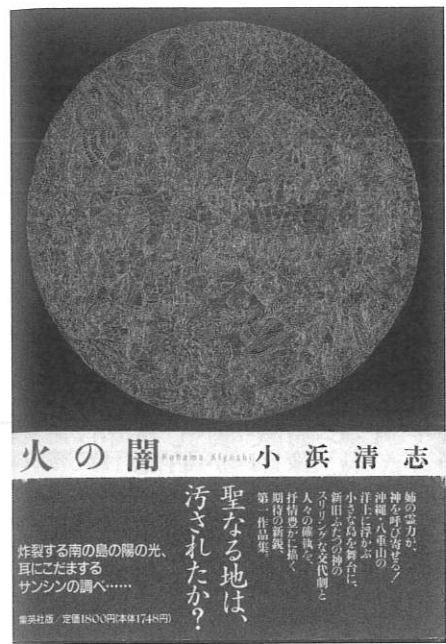
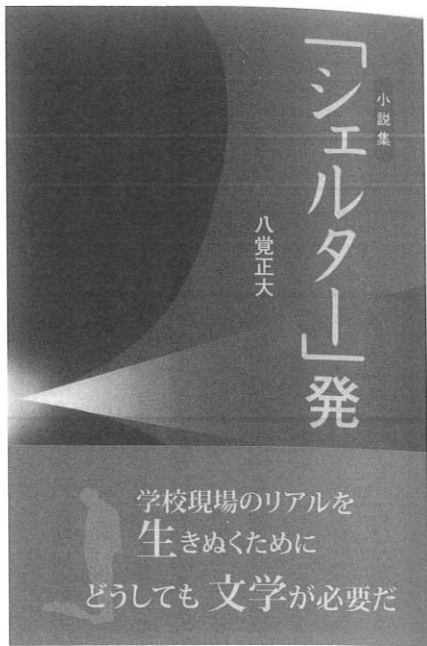
阿部千明「くしゃみ」、現実にもそのような人がいるのかどうかは問題ではないが、着想に関心をもつた。壊れていく老人、常人から逸脱していく過程を上手に展開している。しかし、このようなテーマを扱うのはとても難しいことだ

ろう。つまり、常人が読んで理解できない場面をどう書いていくのか、これは難問である。

倉木基志「キム・ジョンウン先生、革命の日は近いようです。」は、思わず苦笑してしまうタイトルとは真逆に、在日を扱った重いテーマである。私の知人の在日の方から色々と話を聞いているので、この問題の根は深いことがわかる。価値観の違いだけではなく人生の捉え方のぶつかりでもある。しかし、雑多な人間の衝突を超越して、同性の結婚パーティという締めは安易すぎないだろうか。同性婚にしても、それが超人と見えてしまうのは常人側からの解釈ではないだろうか。

西山慶尚「最後の帰郷」、予科練に入隊していた義行が休暇を得て一年ぶりに四国の山間にある故郷へ帰ってくる物語である。日頃の訓練から死を覚悟している義行の所作は幼い兄弟たちには眩しい。家から二キロほど離れたバス停へ、父・定義を子供たちが迎えに行く。定刻を大きく遅れて到着した義行がトランクを地面に置き、父親に敬礼をする。その悲しいまでに美しい挙措に子供たちは胸をわしづかみにされる。年末年始の五日間を家族親族、そして村人たちとの交流を描いたこの作品は、静かではあるが奥に隠された軍人の覚悟がじわりと伝わってくる。銃剣術大会で見せる義行の荒々しさは死を予感させて寂しい。戦争はこのような若者を犠牲にしてきたのである。当選に異議は





ない。  
森本あさ子「向日葵」も、当選作にふさわしい作品である。自転車に乗っていないながら停車中のトラックに激突しハンドルで内臓を痛めて手術入院という闘病記である。実際に体験しただろうと思わせる病人目線の書き方にリアリティがあり、迫力もあった。異なった視線から同じテーマでもう一作書くこともおすすめしたい。当選おめでとうございます。

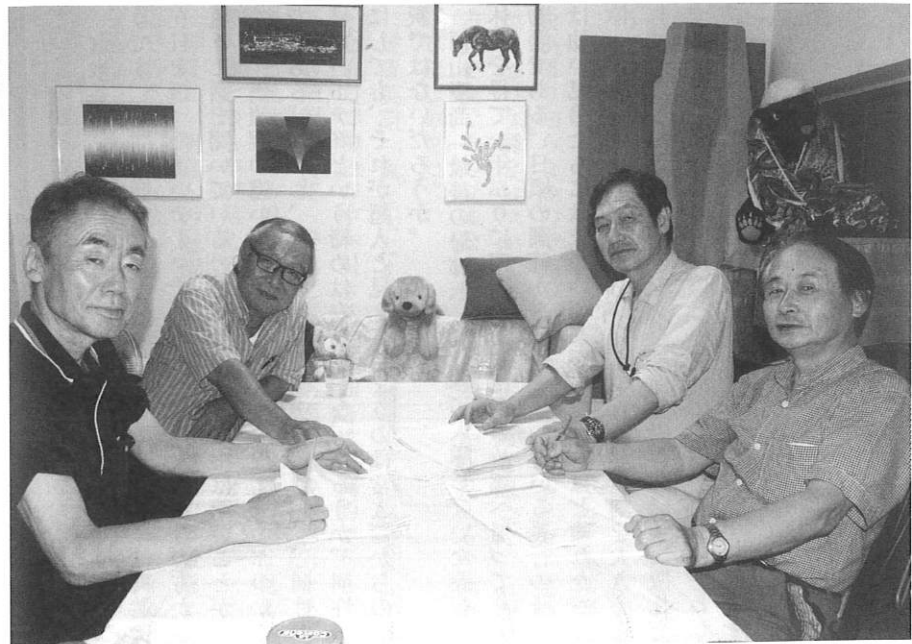
銀華文学賞選考委員プロフィール

**大高雅博** おおたか まさひろ  
1954 石川県生まれ 日大国文学科卒  
80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞  
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

**小浜清志** こはま きよし  
1950 沖縄県生まれ  
劇団四季など様々な職を遍歴  
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める  
88 「風の河」で文学界新人賞を受賞

**八覚正大** はっかく まさひろ  
1952 東京生まれ  
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒  
91「十二階」で新潮新人賞受賞 文藝学校・NHK 学園講師 主著『「シェルター」発』（けやき出版）『夜光の時計』（新読書社）詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』（共に洪水企画）

**五十嵐勉** いがらし つとむ  
1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒  
79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞  
84-90 タイ在住、カンボジア問題取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長  
主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』『ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ』『破壊者たち』



作家集団「塊」新メンバー募集中

## 最後の帰郷

西山慶尚

仁科家の庭先には一本の富有柿の木が植わっている。かなりの老木だが、生えている土地が合っているせいかな、毎年沢山の実を付けている。

秋祭りが過ぎると、柿の実の色づき始める。そして、秋が深まりそろそろ霜が降り出す頃に最も甘みがのるのだが、男の子どもたちはそれまで待っていない。一つ食べ二つ食べして、一番の旬の頃には、手の届かない天辺付近にわずかに残っているだけになる。

ところが、今年は様子が違っていた。十一月も半ばを過ぎたというのに、すっかり葉の落ちた柿の木には色鮮やかな実が枝もたわわに残っていた。それには訳があった。こ

の暮れに休暇で帰って来る兄に食べさせようと、妹の祥子さちこが木の根元に「この柿食べるべからず」という大きな看板を立てたからである。この看板は効果てきめんで、さしもの子どもたちも、ただ恨めしそうに見上げるだけで全く手が出せなかったのである。

しかし、このように大切に見守ってきた柿の実も、そのうち熟して落ち始めた。そこで祥子は新聞紙で袋を作り柿の実を包んだ。そうしておくこと、霜に当たらず長持ちするだろうと考えたのである。この方法は功を奏したかに見えたが、師走に入って冷たい木枯らしが吹き始めると、柿の実は無情にも袋ごとポトポトと落ちて潰れた。祥子は、日毎に少なくなっていく柿の実を数えながら、「どうか兄あにちゃんが帰って来るまでは落ちませんように」と祈りなが

ら兄の帰郷を待ちわびた。

兄の義行は仁科家の長男で、下には四人の妹と二人の弟がいる。長女は女子師範学校へ入学しているので、青年学校へ通っている次女の祥子が、母親の片腕となって家の仕事を手伝っていた。次男の義直は国民学校高等科の一年、三男の末っ子は三歳だった。

昭和十六年五月一日、義行は十七歳で予科練（海軍飛行予科練習生）を志願し、土浦海軍航空隊へ入隊した。

兄はどうして予科練を志願したのか。私にはその動機はよく分からないが、母の話によると、兄は子どもの頃から飛行機に興味を持っていらしい。爆音が聞こえて来ると、食事中でも慌てて飛び出して空を見上げ、飛び去った後もいつまでも名残惜しそうに見つめていたという。

このように飛行機への興味があったことは間違いないだろうが、同時に、予科練への憧れや軍国少年としての気負いもあったかもしれない。しかし、私はただこれだけの説明では足りないような気がする。

これも母から聞いた話であるが、旧制中学へ進学したかった兄はある日、こっそり母に打診してきたそうである。そこで母がそれとはなしに夫に相談すると、夫は言下に「百姓の長男が上の学校に行くことはない」と言って却下した。

そう言われてみれば、中学へ進学している者は近隣の村々でも数人で、彼らはみな村長や庄屋などの分限者の息子だけである。彼らに比べると、自分は貧しい百姓の長男で、しかも下には六人の妹や弟がいる。父が反対するのも無理はない。兄はそう思っただけで諦めようとしたのではなからうか。しかし、成績もよく人一倍多感な少年だった兄は、このまま辺鄙なこの地に身を埋めようという気にはなれなかったに違いない。

中学が無理なら予科練へ行こう。そう思い立った兄は、気兼ねをしながら必死に父を説得したのだろう。初めのうちは渋っていた父も最後には同意した。

あのとき、あの子が志願するのをどうして引き留めなかったのだろうか。母は九十三歳で死ぬ間際までそのことを悔いていた。

当時、予科練は少年たちの憧れの的であり、その試験は難関だったらしい。合格の通知が届いたとき、兄は「いよいよ来たか」と言っただけで空を見上げ、しばし絶句していたという。その絶句が何を意味していたのか、私は知る由もないが、ただ単なる合格した喜びのせいだけではなかったのではないかと思われる。

予科練を終えてから、兄は矢田部海軍航空隊（土浦）と百里原海軍航空隊（茨城県／爆撃機・攻撃機の慣熟訓練）で訓練を積んだ後、実戦部隊である大分県の佐伯海軍航空

隊へ配属された。そして空母艦載機の搭乗員として当時マリアナ諸島方面で予想された決戦に出撃する前に休暇を得、一年ぶりに四国の山間にある故郷へ帰って来た。昭和十八年十二月三十日のことである。

その頃、日本はアメリカの激しい反撃を受け、抜き差しならない劣勢に立たされていた。昭和十七年六月、海軍はミッドウェイ海戦で大敗を喫し主力空母と熟練搭乗員のお多クを失っていたし、昭和十八年に入ると陸軍はガダルカナルを撤退し、五月にはアッツ島守備隊が玉砕、マキン・タラワにアメリカ軍が上陸していた。

その日は、祖父母を初め近所に住んでいる叔父叔母が朝から集まり、歓迎の準備に余念がなかった。いつもなら正月の準備で忙しい時期なのだが、そんなことに構っている暇はなかった。昼前には従兄弟姉妹たちもぞろぞろと集まって来た。義行は従兄弟姉妹が多く、父方と母方を合わせる二十人近くいる。その従兄弟姉妹たちは最年長である義行を「兄ちゃん、兄ちゃん」と呼んで慕い、かつ一目を置いていた。

「さあ、そろそろ出迎えに行ってみるかいいの」

午後の四時を少し回った頃、父親の定義が誰とはなしに言った。

「バスが着くのは五時半じゃろがな、まだ一時間以上もあ

るぜ」

叔父の利勝が横槍を入れた。利勝は定義のすぐ下の弟である。

「いや、五時二十五分じゃ」

二十五分も三十分も大差はないが、出鼻を挫かれた定義はむっとして言い返した。

バス停は家から二キロほど離れた荷刺<sup>にさし</sup>というところにある。富野川が本流の脇川と合流する地点で、そこには小さな雑貨屋と水車小屋がある。子どもの足でも三十分足らずで行けるので、そんなに早く出る必要はなかったが、定義はじっとしておれなかった。

一刻でも早く息子の顔を見たいという気持ちもあったが、もともとせっかちな性分の定義は、何事によらず早目早目に行動しないと気が済まないところがあつたのである。地区の寄り合いなどもそうで、どんな寄り合いでも、必ず三十分前には家を出るので遅刻をしたことは一度もない。せっかちな上に、几帳面なのでもある。その点、気が長くルーズなところのある利勝とは対照的だった。

「雪も降り始めたし、早目に行っちゃよかんといけん」

さすがに少し早過ぎると思つたのか、定義はそれらしい言い訳をし、「迎えに行きたい者は手を挙げよ」と子どもたちに希望者を募った。子どもたちは一斉に手を挙げた。それにつられて末っ子も手を挙げたが、彼は連れて行って

もらえなかった。母親の菊枝も家事を人に任せて出かけるわけにはいかなかった。

荷刺へ着いた頃、雪は本格的に降り始め辺りは薄暗くなった。雑貨屋は早々と店を閉めている。彼らは裸電球が灯った軒先を借りて身を寄せ合つた。じっとしていると足先から寒さが込み上げて来る。バスは定刻を過ぎてもやって来ない。

「ちよつと見てこうわい」

痺れを切らした義直は防寒頭巾を被り直し、三百メートルほど先にある大きな曲がり角へ向かつて走って行った。

「どうじゃ、バスは来よつたか？」

しばらくして、雪まみれになって帰って来た義直に従兄弟の周一が尋ねた。周一は利勝の長男で、義直と同年である。

「いや、まだ来よらんかった」

「よし、そんなら今度はおらが見てこうわい」

代わって周一が偵察に出たが、定刻を三十分過ぎてもバスはやって来なかった。辺りはすっかり暗くなり、木枯らしの途絶えた合間から脇川のせせらぎと水車の単調な杵音が響いてきた。もうバスは来ないのではないか。口には出さなかったが、誰もが不安を募らせた。

そのとき、遠くの方に一条の光芒が差した。バスのヘッドライトである。その光芒は消えかかったかと思うとまた

明るくなり、右へ左へ大きく空を掃きながらゆつくりとこちらへ向かつて近づいて来る。義直と周一が駆け出した。二人が曲がり角の手前まで行つたとき、その光芒は大きく旋回してバスが現れた。眩い光芒の中に二人のシルエットが浮かんだ。目が眩んだのか、二人はしばらく立ち尽くしていたが、やがてくるつと向きを変え、バスの先に立って走り始めた。

ヘッドライトに追われる野兎のように、彼らは時々立ち止まって後ろを振り返った。それは、のろのろと走るバスを挑発しているようにも見えたし、また追い付かれそうになつたバスに先を譲るべきかどうかと逡巡しているようにも見えた。二人の奇怪な行動に困惑し、運転手は何度も警笛を鳴らした。

やがてバスが着いた。三人の乗客が降りた後、義行が大きなトランクを下げてゆつくりと降りてきた。

七つボタンの紺色の制服、桜と錨をあしらつた帽章、そして白い手袋。子どもたちは憧れの予科練の制服姿を目の当たりにし、感動して言葉が出なかった。

トランクを地面に置くと、義行は背筋を伸ばし不動の姿勢で父親に敬礼をした。

「ただいま帰って参りました」

「戻って来たか」

ただそれだけ言ううと、父親は狼狽<sup>うろた</sup>えたように上着のポ



ケツトからマツチを取り出し、何度も擦り直して提灯に灯を点けた。いかにも素っ気ない応対だったが、提灯の灯に浮かんだ父親の横顔にはいつものあの厳格な表情は失せていた。

「みんなも迎えに来てくれていたのか」

そう言いながら、義行は子どもたちを見渡した。子どもたちは恥ずかしそうにして挨拶もできなかった。

提灯を持った父親は義行と並んで先頭を歩き、その後に子どもたちが続いた。義行のトランクは義直と周一が奪い合うようにして交互に担いだ。

「兄ちゃんはまた背が伸びた」

すぐ後ろを歩いていた祥子はそのことに気が付いた。この前に帰って来たときそれほどでもなかったのに、今夜の兄は父より頭一つ分だけ抜きん出ているように見えた。

二人は少し言葉を交わしただけで、ほとんど無言のまま歩いた。一年ぶりの再会なのに、何も話すことがないのだろうか。私だったらいくらでも話したいことがあるのに、と祥子は不思議に思えてならなかった。

兄の身体からは、今まで嗅いだことのなかった微かな匂いが漂ってきた。昔の兄の匂いではない。その匂いなら覚えていた。これが海軍の匂いなのだろうか。祥子は鼻をひくひくさせながら匂いを嗅いだ。

荷刺からの村道は富野川の谷間に沿って走っている。両

の様子を、子どもたちは物珍しそうに襖の隙間から盗み見していた。

義行が風呂から上がるのを待って、全員が囲炉裏の回りに集まり夕飯となった。義行は、末っ子の弟を膝に乗せ大黒柱を背にした杵を一人で占めた。いつもは父親が座っている上座である。その左の杵には父親と祖父が座り、右の杵と正面の杵には祖母と叔父叔母たちが座ったので、子どもたちが座る余地はなかった。そこで、彼らはわずかな隙間を見つけてできるだけ火の傍へ近付こうとしたが、大人の壁に阻まれ近付けなかった。囲炉裏の火は赤々と燃え、自在鉤に架かった大きな雉鍋はふつふつと煮えている。

定義たちは下戸であり、四人の兄弟が集まってもお銚子一本もあれば事足りた。ところが、義行は違った。彼は顔色一つ変えることなく、勧められるままにいくらでも飲んだ。あの子はあんなに飲んで大丈夫なのだろうか、と母親はやきもきしながら欄を付け、下戸の叔父たちはせつせつと酌をした。

話は盛り上がった。話題は義行の子どもの頃の話が中心で、義行がああ言ったとかこうしたという話が次々に飛び出した。こういう話にかけては、祖母や叔母たちの記憶は確かだった。義行はかなり腕白だったらしく、話は尽きなかった。

「あの兄ちゃんが本当にそんなことをしたんだろうか」

側から雑木が覆い被さっているので昼間でも薄暗く、その途中には藪淵とどろという底知れない淵やそこを通るとカラカラと足音が響く堀切など薄気味悪いところが何箇所もある。殿しんがりを務めている義直は、背後の暗闇に引きずり込まれたい欲しいとは言えなかった。

村道を外れ平野橋を渡ると、そこから先は上り坂となる。その坂道を登り切ると視界が開け、雪明りの中に郷里の家々が浮かび上がった。

「おお、よう戻もて来た」

玄関の戸を開けると、祖父が板の間に正座して待っていた。

「ばあさんは何をぼやぼやしよるんぞ。早よ上がらして飯を食わさんか」

祖父は制服姿の孫に見惚れていた祖母を急せかした。いつもは口数が少なくおっとりしている祖父には珍しいことだった。

日頃、子どもたちは神棚が祀つてある座敷は使うことはない。それどころか、用事があるとき以外は出入りするこどさえ禁じられていたほどである。その神聖な座敷で、義行は制服とズボン脱ぎ、母親が用意していた浴衣と丹前に着替えた。そして、脱いだ制服とズボンは丁寧に折り畳んで机の上に置き、その上に制帽と白い手袋を載せた。そ

大人の話を耳を傾けながら、子どもたちは容易に信じられなかった。

話が一段落したところで、祥子が辛うじて落ちずに残っていた富有柿を大事そうに皿に入れて持って来た。母親が経緯を説明すると、義行は「そうだったのか。干柿ならともかく、この時期に生の柿が食えるとはめずらしいな」と言つて摘まんだ。ところが、熟し過ぎていた柿は潰れ、古くなった生卵を割つたように皿の上にとろろと流れた。すると、義行は皿を両手で支えて口元へ運びずると啜つた。昔から甘いものには目のなかつた義行は残りの二つも平らげた。祥子はほっとして母親と顔を見合わせた。

「義行よ、本当のところ、今の戦況はどうなつちよるんぞ。あんまり芳しゅうないという話も耳にするんじゃが」

義行が柿を食べ終えるのを待ち受けていたように、利勝が話を切り出した。

あいつはまた余計なことを言う、こんな時にわざわざそんな話を持ち出さんでもいいのに、と定義は顔を顰しかめたが、彼自身も内心ではそのことが気に掛かっていたのである。

新聞やラジオは相変わらず華々しい戦果を報道しているが、日本は本当に勝っているのだろうか。あからさまには口に出さなかったが、勘のいい利勝は、かねてからこれらの報道に不審を抱いていたのである。

そこで利勝は、軍籍にある者なら、たとえば下級兵士で



あつても戦争の趨勢を肌身で感じているはずであり、特に義行らのような海軍の飛行機乗りなら、その辺りの事情を詳しく知っているに違いないと思つて尋ねたのだったが、義行の返答はつれなかつた。

「さあ、自分らにはよく分かりません」

「なに、分かん。分かんことはあるまいが！」

当てが外れた利勝は向きになつた。

「自分たちはただやるだけです」

義行の口調は穏やかだったが、利勝はその言葉の背後に並々ならぬ決意を感じ取つた。

「そうよ、そうじゃないといかん。陸軍ではもうどうにもならん。頼みの綱は海軍で、なかでも義行らのような飛行機乗りが決死の覚悟でやってくれんと今の戦況は挽回できん」

機嫌を取り直した利勝はしたり顔で言つた。誰も反論する者はなく、彼は得意そうにいつもの癖の鼻を鳴らした。

「義行よ、無理をすることはないぞ」

それまで黙つて聞いていた祖父が脇から口を挿んだ。

若い頃、祖父は日露戦争に従軍した。そして、日露戦争でも最大の激戦であつたとされる旅順攻撃に参戦し、九死に一生を得た。その戦功が称えられ立派な勲章も貰つていゝ。ところが、祖父はその勲章や日露戦争にまつわる話を、他人にはもちろんのこと家族の者に対してもしようとしな

祖父はまだ何か言い足りなさそうに歯が抜けて萎んだ口をもぐもぐさせた。戦争の話はここで立ち消えになり、そこから先は別の話題に移つた。

大人たちの話はいつ果てるとも長く、男の子どもたちは退屈した。そこで、彼らは互いに目配せをし、トイレに行くような振りをして中の間へ集まつた。中の間には炬燵が置いてある。彼らは我先に潜り込み、しびれて冷たくなつていた足を思い切り伸ばした。

一息つくと、話は自ずと義行のことになつた。間近で見た義行の七つボタンの姿も迫力があつたが、その義行が「ただ今、帰つて参りました」と言つて敬礼をした光景は何と言つても圧巻だつた。彼らはその光景を話題にしなから感動に浸つた。ただ話すだけでは満足できず、立ち上がつて義行の所作を真似して見せる者もいた。

彼らにとっては、義行の言うこと為すことすべてが好奇の的だつた。そこで、一番の知恵者で通つてゐる周一は、義行の言動一つ一つにもつとらしい意味を付け、皆に解説して聞かせていた。しかしただひとつだけすつきりと解説できないことがあつた。それは義行が利勝に言つた「自分たちはただやるだけです」という言葉だつた。

その言葉を聞いたとき、周一は身の引き締まる思いがすると同時に、それとは逆の何か投げ遣りな諦めにも似たものを感じ、義行の本心を測り兼ねていたのである。

かつた。そのため、村内の口さがない連中からは、祖父は旅順攻撃には参戦していなかつたのでないかと、あの勲章は偽物ではないかといったあらぬ噂を立てられたこともあつた。

「義行の身に万一のことがあつたら、戦争に勝つてもなんぢやにならん。先の戦役もそうじゃつた。戦争にやあ勝つには勝つたが、戦死者を出した家族のものは誰一人として喜んじよるもんはおらんかつた。わしのように生きて帰つて来たもんもそうじゃつた。バタバタと死んで行つた戦友のことを思うと、とても喜ぶ氣にやあなれなんだ」

「おとつあんみたいなことを言いよつたら、勝てる戦争にも勝てんぞな」

「お前は戦争に行つたことがないけん、そがいなことが言えるんじや」

「……」

養子にやられた利勝は、戦争はおろか軍隊へ入つた経験もない。

「大丈夫です。自分はこれでも技量優秀で通つてきた搭乗員ですから、決してヘマはしません」

義行は気まずくなつた二人の間を取り成した。

「そうは言うても義行は飛行機乗りじゃけん。空にやあ、弾をよけるところもなければ隠れるところもないけん……」

「こうなつたら、直接確かめてみるより外に方法はない」  
そう思つた周一は、「どうじゃ、みんな。兄ちゃんにこへ来てもらうていろいろと話を聞いてみんか」と提案した。誰も異存はなかつた。しかし、問題は誰が義行を呼びに行くかということだつた。そこで、彼らはしばらく押し付け合つた挙げ句、くじ引きをして決めることにした。その結果、いつもくじ運の悪い智樹が当たつた。智樹は周一の弟で、初等科の二年である。

「どう言うて、呼んで来たらいん？」

智樹は途方に暮れた様子で周一を見つめた。

「いいか、みんなで聞きたいことがあるけん、ちよつと来てもらうわけにはいかんじやろかと言えや」

周一は智樹の肩を抱き抱えるようにして言い含めた。智樹は渋々席を立つた。果たして兄ちゃん来てくれるだろうか。周一たちは息をひそめて待つた。

「何か聞きたいことがあるらしいな」

智樹が戻つてから間もなく、義行がにこにこしながらやつて来た。ところが、いざ本人を前にすると、氣後れした周一は黙つたまま俯いた。ほかの子どもたちもそれに倣つた。

「どうした、遠慮せんでもいいぞ」

「……」

周一はなおも俯いたままだつた。すると、脇に座つてい

た義直が、「早よ何か言わんか」と小声で周一の腿を突いた。

「あんな、兄ちゃんの飛行機の話を開こうと思うて」

周一はようやく口を開いたが、一番聞きたいと思つてゐたことは聞けなかつた。

「飛行機の話か……」

義行はしばらく躊躇つていたが、やがて「よっしゃ」と言つて炬燵へ入つてきた。

「自分が乗っているのは零戦という戦闘機を爆撃用に改造したものじゃ。『天山』という爆撃専門の飛行機の生産が間に合わないんで、零戦を改造したんじゃ。『爆戦』と呼んでいるけどな。これに二百五十キロ爆弾を積んで、空母から飛び立ち、爆弾を投下した後は空戦をやることになつとる。空母の甲板の広さは家の前の田圃を三枚合わせたほどあるが、上空から見ると、小さい木の葉が一枚浮かんでいるようなもので、その上へ高速で着陸せんといかん。だから、なかなか大変なんぞ」

子どもたちは頭を起こし、目を輝かせて聞き入つた。

「飛行機は鉄で出来ちよるんじゃろな、その重たい飛行機がどうして空を飛べるんじゃろか？」

手先が器用で模型飛行機作りが得意な智樹にとつて、それは以前から抱いていた素朴な疑問だった。

「それはいい質問だ。しかし、その説明はなかなか難しい

……」

「兄ちゃんは戦争に行ったことがあるんか？」

義行がどう説明したものと考へている隙に、義直が勝手に割り込んで来た。

「いや、まだ実戦には参加していない」

「いつ行くんか」

「いつとは分らんが、いずれ行くことになる」

「おらも予科練へ行つて兄ちゃんみたいな飛行機乗りになる」

「義直は飛行機乗りになりたいのか」

「なりたない」

「そうか。しかし、飛行機乗りは命がけの仕事だし、それにお前が飛行機乗りになる頃には戦争はもう終わつとるじゃろう」

「日本は勝つじゃろか？」

「さあ、どうかなあ」

「おらも早よ飛行機乗りになつてお国のために尽くさんといいん」

「いいか、お前は仁科家の次男だ。飛行機乗りなんかにならず、兄ちゃんの代わりにこの家を守つてくれ」

義行は義直を見つめながら諭すように言つた。

翌日の大晦日は正月の準備に追われた。いつもの年は、

餅つきは二十九日、注連縄作りは三十日と決まっているのだが、今年餅つきと注連縄作りを大晦日に行うことになつたのである。義行も早々と起きて手伝つた。

年が明け、昭和十九年の元旦を迎えた。年末から降り続いていた雪も止んだ。空は清々しく晴れ上がり、あちこちで雀がさえずっている。

元旦の朝は年を取る儀式から始まる。父親は子どもたちを連れて床の間の前に正座し、子どもたちには意味のよく分からない祝詞を唱え三方を押し戴く。その三方には干柿や蜜柑などが載せられており、拜んだ後に、それぞれ一個ずつ持つて来て食べるのだが、種の数が自分の年と同数だと大吉とされていたので、子どもたちは種の数を一つ一つ数えながら慎重に食べた。

その頃には雑煮ができていた。しかし、人が食べるのは後回しで、その前に、神様へ供えなければならぬ。神様はいたるところに祀つてあり、床の間の神様から始まって、道具の神様、かまどの神様、水の神様などその数は十指に余る。しかも、供える順番も決まっている。いつもは父親が供えているのだが、今年義行が代わつて供えた。

元旦の朝の食卓はいつも晴れ晴れしい気持ちになるが、義行が帰つて来た今年はまだ格別だった。雑煮は自分の年の数だけ食べるのだと父親が冗談交じりに言つと、それを真に受けた義直は、目標の一個手前まで食べたところで

餅を喉に詰まらせた。

雑煮を食べ、そろそろ初詣に出掛けようとしていたとき、村の青年団の若い衆が伝言を持つて来た。国民学校で銃剣術大会をやるので、義行にも是非参加してほしいという伝言だった。この大会は正月恒例の行事で、在郷軍人会が主催していた。

義行はあまり気乗りがしなかつたが、父親も勧めたし、自分も久しぶりに母校を訪れてみたかったので参加することにした。

「お父さんも来られるのですか」

「いや、わしはちよつと用事がある」

父親も見に来てくれるものと思つていた義行はがっかりしたが、無理に来て欲しいとは言えなかつた。

兄ちゃんが銃剣術大会に出る。そのことを知つた義直は、早速、隣近所にいる従兄弟たちに触れて回つた。

義行は制服を着て会場へ向かつた。義行を先頭にして、その後に弟と従兄弟たちが一列になつて従つた。誰も通っていない純白な雪の上に、義行の大股の足跡が刻まれて行く。その足跡を踏み外さないようにと、子どもたちは精一杯歩幅を広げて歩いた。

校門を入ると、大勢の人だかりの中で在郷軍人会の会長が待つていた。彼は丁寧に年始の挨拶をすると、観衆の間をぬつて義行を控室へ案内した。試合の合間だったので、

観衆は一斉に視線を注いだ。その中を義行は真つすぐ前を向き歩調を取って歩いた。意識的にそうしたのではなく、人前で歩くに自ずとそうなるのである。

七つボタンの制服姿は凛々しく、観衆のもらす溜息が子どもたちにも伝わって来た。彼らは顔を赤らめ俯き加減で後に続いた。

ここで支度をしてください、と会長は西校舎のとある教室へ義行を案内した。それは偶然にも義行がかつて学んだことのある教室で、小さな机と椅子が整然と並んでいた。

「こんなちっぽけな机と椅子に座って勉強していたのか……」

義行は机を撫でながら教室の中を巡った。あの頃は随分広いと思っていた教室も、今こうして見ると窮屈なほど狭かった。

一巡して戻って来たとき、義行は黒板の下の腰板に見覚えのある節穴があることに気が付いた。節穴の深さを測ろうと思つて鉛筆を差し込み、不用意にも、買ったばかりの大切な鉛筆を落とし込んだ節穴である。あの鉛筆はまだ残っているだろうか、と近寄つて覗いてみたが、中は真つ暗で何も見えなかった。

そこへ係りの者が防具を持って来た。義行は制服を脱いで裸になった。兄ちゃんは寒くないのだろうか。寒がり屋の子どもたちは身震いした。初めて目にする義行の肌は白

く、その肩口から胸元にかけて分厚い筋肉が盛り上がっていた。

試合場は運動場である。日差しはあるものの、雪はまだ溶けていない。義行は右手で面を抱え、雪の上を素足で歩いて行つた。何試合かの後、義行の出番が回つて来た。種目は五人抜きである。

義行は本部席へ軽く会釈をすると、静かに木銃を構えた。一番手は青年団の中で最も大柄な河野という男だった。一札を交わすやいなや、義行は「トオツ！」という鋭い気合と共に激しい突きを入れた。その突きは河野の胸板をとらえ、彼は三メートルほど後方に吹つ飛び仰向けに倒れた。

「勝負あり！」

審判が叫んだ。ところが、義行の耳には届かなかったのか、義行は倒れた相手に飛び掛かり、所かまわず突きま

くつた。

「ま、参った！」

河野は堪らず悲鳴を上げた。

「つぎっ！」

義行はすかさず二番手を呼んだ。二番手は怯え、救いを求めるように主将格の高橋へ目を遣つた。しかし、彼は逆に二番手の背中をどやしつけて押し出した。二番手はようやく立つには立つたものの、悲鳴を上げるまでものもの十秒もかからなかった。三番手四番手も同様だった。

「あれっ、お父さんも見ておられたんですか？」

「いや、人から聞いた話なんじゃがの……」

人伝に聞いたと言うのは嘘で、実は、彼自身も息子の試合を一目見ようと、後から一人でこっそり来ていたのである。

「あれが海軍のやり方ですから、ついいつもの癖が出て……」

義行は申し訳なさそうに頭をかいた。

兄ちゃんはいつもあんな激しい銃剣術をやっているのだろうか。子どもたちは慄き、義行に対する畏敬の念を新たに

した。翌日の朝、義行は恩師の仙波先生と友人らに挨拶をしに行くと言つて家を出た。昼前には一度戻っていたが、またすぐどこかへ出掛け、帰つて来たのは暗くなってからだった。

義行が家を空けるのは珍しかった。これまで何度か休暇で帰つて来たが、彼は家族と過ごす時間を大切に、外出することはほとんどなかったのである。母親は息子の落ち着かない様子が気になった。

外出は三日の午前中まで続いた。そして、午後になってようやく家に落ち着き、明日の出発に備えて慌ただしく荷物をまとめた。

最後に高橋が出て来た。青年団の団長である高橋は村一番の猛者で、銃剣術に限らず、相撲でも柔道でも彼の右に出る者はいないという評判の持ち主だった。今度はそう簡単にはいくまい。村人たちは固唾を飲んでいたが、結局のところ、彼もほかの四人と同じように悲鳴を上げた。辺りは歓声とどよめきに包まれた。

義行は面を脱いで本部席へ礼をすると、そのまま控室へ引き上げて来た。色白の顔はまだ少し紅潮していたが、その表情は嘘のように元の穏やかな表情に戻っていた。閉会式の講評で、会長は義行の健闘を褒め称えた。

「兄ちゃんはすごかったのう」

「そうよ、おらはらはらしよつたぜ。相手が死ぬるんじゃないかと思つて」

「しかし、青年団長も大したことはなかったのう」

帰りの道すがら、まだ興奮の覚めやらない子どもたちは試合の話で持ち切りだったが、義行は笑っているだけで取り合おうとしなかった。彼らはこのまま別れるのが惜しくなり、義行の家まで付いて来て一緒に夕飯を食べ、試合の話の続きに興じた。

「義行よ、あそこまでがいにやらんでもよかつたじゃろうが」

夕飯の後、父親が言った。

日の暮れかかった頃、義行は末の弟を木馬きんまに乗せて連れ出した。

義行が入隊する一年前に生まれ、年の差が一回り半近くあるこの弟を、義行はこのほか可愛がっていた。これまでに休暇で帰って来たときも、少しでも暇があれば遊び相手をしてやっていたし、両親や妹たち宛てに出す手紙の末尾には、必ず弟の安否と成長ぶりを尋ねる一筆を書き添えていた。

夕飯の準備ができ、親戚の者たちも集まってきた。ところが、弟を連れ出した義行はなかなか帰って来なかった。

「義行はどこへ行ったんぞ」

定義はいらいらして妻の菊枝に当たった。

「さあ、どこへ行ったんじゃるか？」

「最後の晩じゃというのに、けしからん！」

定義の機嫌はおさまらず、菊枝はおろおろするばかりだった。

義行が帰って来てから四日も経つたのに、この間、定義はまだそれらしい言葉の一つも掛けてやっていたいなかった。

その思いはあったし機会もなくはなかったが、いざその段になると、なぜか言葉が滞つたのである。

義行は明朝出立する。ならば、せめて今夜は義行と過ごす時間だけでも長く持とう。定義は朝からそう思つて心待ちにしていたのである。

その道すがら、誰もがあの出迎えの日のことを思い出していた。それはつい五日前のことだったが、彼らにはもう何年も昔のことだったようにも思えたし、また夢の中の出来事であつたようにも思えた。あのときときめくような昂ぶりに比べ、今日のこの淋しさどうしたことか。その余りにも大きな落差に、子どもたちはお別れの言葉すら口にする事ができなかった。

「それでは行つて参ります」

義行は、帰つて来たあの日と同じように敬礼をして車中の人となつた。最後列の席に座つたが、背を向けたまま振り返ることはなかった。

## 二

義行が休暇を終えて帰つてから二か月後の昭和十九年二月、「できたら面会に来てほしい」という短い手紙が届いた。いつ出撃するとは書いていないが、これは近々出撃することになったに違いない。文面からそれを察知した父は家族と親戚の主だった者を引き連れ、急遽大分県の佐伯へ駆け付けた。そのとき母は四男を身籠り臨月を迎えていたので、姑は心配して面会に行くことに反対したが、母は耳を貸さず、腹帯を何重にも巻いて出掛けた。

三歳だった私も連れて行つてもらつた。それまで村から

「たかが夕飯に遅れたことぐらいで、そうガミガミ言わんでもよからうがな、そのうち帰ってくるわい」

そうと知らない利勝は兄の定義を諫めた。菊枝はいたたまれなくなり、誰にも気付かれないようにそつと捜しに出た。

義行の行先には一つだけ心当たりがあつた。それは、義行が子どもの頃によく木馬で遊んでいた所である。菊枝は躊躇うことなくその場所へ直行した。すると案の定、薄暗くなった林の奥の方から末っ子の嬉しそうな歓声が聞こえ、雪まみれになつた義行が全速力で木馬を引つ張つて来た。前屈みになつている義行は菊枝に気が付かず、もう少しでぶつかるところで急停止した。

「みんな集まつて待ちよるんよ、早よ帰つて来んと」

「いや、もう一回りしてきます」

これまで、親の言うことは何でも素直に受け容れてきた義行は珍しく逆らつた。

「いいか、しっかり掴まつとけよ」

そう言い聞かせると、義行は涙でくしゃくしゃになつた顔を背け、再び林の奥へ駆けて行つた。

休暇はあつという間に終わり、いよいよ帰隊する朝を迎えた。大勢の見送りは要らないと言うので、荷刺のバス停へは家族の者だけが行つた。

一歩も出たことのなかった私にとつて、それは生まれて初めての大旅行だったので強烈な印象を受けたのだろう。川幅の広い肱川を海と勘違いして皆に笑われたこと、八幡浜から乗船した船が激しく揺れ棚においてあつた食器類が崩れ落ちたこと、乗船客が吐いた嘔吐物のすえたような匂い、父に抱えられ船のトイレで用を足したときすぐ真下を青白い海水が高速で流れていたこと、溺れそうになるほど深かつた旅館の浴槽、そして海軍病院で会つた傷病衣をまとつた叔父のことなど、極めて断片的ではあるが、今でもあの折の諸々の光景は鮮明に記憶に残っている。ところが残念なことに、肝心な兄の姿は霧の彼方の人影のように薄っすらとしか残っていない。

面会の最後の夜のことを、母は声を詰まらせながら何度か話してくれたことがある。その夜、母と兄は私を間に挟み一つの布団で寝たそうである。二人は心行くまで語り合つていたのである。気が付くと、いつしか夜半を過ぎていた。そこで母は、翌日の訓練に差し支えがあつては、と話を打ち切り、先に寝た。もちろん眠れるわけはなく、ただ眠つた振りをしていただけである。すると、兄はそつと両手を差し伸べ、母の手を固く握り締めいつまでも離さなかつたという。私は二人の気持ちを知ることもなく、すやすやと寝息を立てていたのだろう。



「面会から帰って間もなく、一機の飛行機が高台にある我が家の真上を低空で飛んだ。その爆音に驚き、昼飯を食べていた家族の者はびっくりして表へ飛び出した。しかし時既に遅く、飛行機は下山の向こうへ隠れていた。

「あれは兄ちゃんだったに違いない！」  
子どもたちは興奮してなおも空を見上げていた。すると、再び爆音がして飛行機が引き返してきた。しかし、今度は先程と違って高度が高い。このまま帰ってしまうのかと残念がっていると、村で一番高い御在所山の上空で大きく旋回した。そしていきなり高度を下げ始めたかと思うと、まっしぐらにこちらへ向かって飛んで来て屋根に触れんばかりの超低空で通過した。子どもたちは大声で兄の名を呼び、必死に手を振った。すると、その機はそれに応えるように翼を大きく振って別れを告げ、西空の彼方へ消えて行った。

義行は帰隊して五か月後の昭和十九年五月十一日、「あ号作戦」の命を受けた機動部隊の戦闘爆撃機搭乗員として空母「隼鷹」に乗艦、正午に佐伯を出港した。

すでに前月の四月に海軍は「あ号作戦」として、サイパン島を中心としたマリアナ、豪北、フィリピン方面において海軍の全力を挙げた艦隊迎撃決戦を企図していた。「隼鷹」はその主力となった空母群の一隻である。

「三リ」に到達するも敵空母を発見できず、十一時五十五分再び目標を「七イ」に変更して進撃中、十二時〇〇分敵戦闘機F6F四十機以上と遭遇し交戦中、戦死。享年二十歳。空戦海域はグアム島西方約二〇〇キロのマリアナ海。

三

今年も葵の花の咲く季節が巡ってきた。この花を見ると、私は今でも子どもの頃の六月十九日のことを思い出す。六月十九日は兄義行の命日である。

その日が近付くと、家族の者は誰からともなく無口になり、家の中には気詰まりな雰囲気が始まる。母は小言が少なくなり、日頃は厳格で近寄り難い父も、時折物思いに沈んだ表情を見せた。

当日は早起きをし、朝食前に家族全員で墓参りをした。朝露で湿った草叢を掻き分けて墓地へ赴き、墓前には決まって背の高い葵の花を供えたものだ。

その葵は野菜畑の隅に植わっていた。いつ頃、誰が植えたのか定かでない。まだ蕾がたくさん残っている茎を数本切り取り、それを墓地まで担いで行くのが、私たち子どもの役割だった。葵の茎や葉には小さな毛が着いていて、首筋や腕に当たるとヒリヒリと痛痒い。そのヒリヒリとした感触と葵の独特な匂いは、今でも私の感覚の中には残って

義行のその後の足取りは次の通りである。

五月十六日夕刻、「隼鷹」はフィリピンのタウイタウイ島へ到着、小沢艦隊主力と合流。艦隊兵力は空母九、戦艦六、巡洋艦十三、駆逐艦三十三、補給艦十二の計七十三隻。六月十三日、タウイタウイ島を発ちギラマス島へ向かう。翌十四日午後、ギラマスに入港し燃料補給。同日「あ号作戦」発動。

六月十五日午前八時、ギラマスを出撃。サンベルナルジノ海峡を通過し一路東進。

六月十八日、サイパン島西方七百海里の洋上を急行。早朝より出撃に備え待機。敵情判断により、翌十九日に総攻撃を行うこととなる。米空母十五、戦艦七、巡洋艦二十駆逐艦六十七。マリアナ沖海戦。

六月十九日、午前三時四十五分、四十五機の偵察機索敵発進。日の出一時間前に一航戦（第一航空戦隊）、二航戦、三航戦の第一次攻撃隊の戦闘用意完了。義行の所属は二航戦第一次攻撃隊。機種は爆戦（爆撃戦闘機）、機番号二。指揮官石見少佐。午前七時二十五分、三航戦第一次攻撃隊六十四機発艦。次いで午前九時、義行の所属する二航戦第一次攻撃隊四十九機発艦。厚い雲に阻まれ編隊が組めず二群に分かれる。九時三十分、命により「七イ」の目標を「三リ」に変更。十一時三十五分、戦艦を含む一群を発見したが攻撃せず、空母を求めてさらに進撃。十一時四十五分

いる。

兄の戦死の公報が届いたとき、四歳になったばかりの私は、悲嘆にくれた両親の様子や周囲のただならない雰囲気から、これは兄の身にきつと何か大変なことが起こったのだらうという漠然とした不安のようなものは抱いていたが、人の死を理解できる年齢には達していなかった。その証拠に、葬儀の当日、私は一つ年上の従兄を追いかけ、弔問客の間を嬉しそうに駆け回っていたことを覚えている。

それから間もなくして、父方の祖父も亡くなった。当時は土葬であり、墓穴は、葬儀の前日に組内の者が掘ることになっていた。これは、叔母の一人から聞いた話だが、その作業を熱心に見守っていた私は、「おじいさんはいいなあ、大きな防空壕を掘ってもらうて」といかにも羨ましそうに語ったそうである。四歳の子どもが冗談や冷やかしてそんなことを言うはずはないから、本気でそう思っていたのだらう。

もう二十数年も昔の話になるが、娘がグアム島へ観光旅行に出かけた。そのとき、私は娘に「グアム島の西海岸は兄が戦死したマリアナ海だから、機会があったらこの米を海に投げてくれないか」と言って一握りの米を託した。その米は、家の跡を継いでいる郷里の次兄が送ってきてくれたものだった。



タイのすべてがここに  
 特価 2000 円 (税込/送料共)  
 注文はアジア文化社まで



1540 円 (税込/送料共)  
 御注文はアジア文化社まで

☆「芸芸思潮」は下記の書店で店頭販売されております。

〔東京〕  
 ジュンク堂池袋本店  
 紀伊國屋書店新宿本店  
 〔山梨〕  
 山梨朗月堂書店  
 〔大阪〕  
 MARUZEN & ジュンク堂梅田店  
 〔鹿児島〕  
 丸善ジュンク堂鹿児島天文館店  
 〔インターネット〕  
 アマゾン



1512 円 (税込/送料共)  
 御注文はアジア文化社まで



西山慶尚  
 にしやま よしひさ  
 1940 愛媛県西予市野村町(旧東宇和郡中筋村)に生まれる  
 64 東京教育大学理学部卒  
 その後、愛媛県内の公立高等学校等に勤務  
 2001 定年退職  
 1999 年より芸芸同人誌「海峡」に参加し、現在まで小説を発表する  
 愛媛県新居浜市在住



グアム島を発つ前日の夕刻、娘はグアム島の西海岸へ赴き、その米と花束を落日のマリアナの海に向かって投じた。そのとき、二人の女友達が同行し、一緒に手を合わせてくれたそうである。

「茶髪の娘たちもなかなかやってくれるわい」  
 私はその光景を想像しながら、彼女たちの好意を無性に嬉しく思ったものである。

兄が戦死してから七十四年の歳月が流れた。父母を初め叔父や叔母はみな他界し、当時四歳だった私も傘寿を迎えようとしている。今は廃屋になっているが、私たちが生まれ育ったあの家には、今年もまた葵の花が咲いているに違いない。

銀華文学賞 受賞の言葉 西山慶尚

思いがけず最優秀賞をいただき、驚くと同時に大変光栄に思っています。御推挙いただいた審査員の皆様にご心から御礼申し上げます。

これまで、私はあの戦争のことを書いて来ましたが、今回の作品も、予科練を志願して戦死した実兄のことを書いたものです。今さら戦争のことを、と思われるかもしれませんが、私にはどうしても書き留めておかねばならないテーマでした。

あの戦争では、日本だけでも三百五十万の方が亡くなっています。一口に三百五十万と言いますが、そこには三百五十万通りのかげがえのない人生と悲しみがあつたわけですから。しかし、彼らのことを書いたものはあまりにも少ない。

戦後七十四年、日本人の多くはあの戦争のことを忘れ、目先の利益を追い求めることに汲々としているように思えてなりません。私が戦争のことを書く理由も、その辺りにあります。今回の受賞を弾みとして、今後も書き続けたいと思っています。

## 向日葵

森本あさ子

天井に細長い蛍光灯が一つ、時間のわからない夜を照らし出していた。蛍光灯の両端を通って過去から未来が流れていくようだった。見つめているうち、どっちが過去か未来かわからなくなった。視線に近い方が現在、遠い方が過去と言いつれない混乱した思考が天井にふわふわと漂っていた。過去と未来が逆だとするとこちらに向かつてくる意識の流れは、過去に向かつて後戻りをしているのかもしれない。そうではなく、未来はなく現在しかないのだ。それが、閉じ込められた視界のせい——横を向くとさえてできない一方的な視点のせいだとは、まだわからなかった。ただ、さつきから漠然と思っていたように、頭の方、足の方向に沿って蛍光灯が、つまり、蛍光灯の下に平行に自分の身体があるらしいことが次第にわかってきた。沢山の顔が上から見下ろし覗き込んでいた。胴上げから落

とされるのはこんなだろうか。されたことはないけど。そうではなかった。

——手術、終わったんよ

その中の一人が言った。すべての顔が徐々にハッキリしてきた。

十四歳の少女は、そこが病院の廊下だと思った。頭の方にあるのは、多分、過去でも未来でもない。手術が終わって、今から私が入る病室の入り口があるのだ。

私は一つ、何か厄介なものを乗り越えたのだ。私は、もういいのだ。済んだんだ。次に災厄を受けるのは、誰だろう。名前も顔も浮かばず、クラスメート達が通り過ぎて行った。父、母、祖母、医者、看護婦……大勢の顔が上から……少女を見下ろしているのは大人ばかりだった。不思議なのは、誰もがいつまでも同じ姿勢で覗いているばかり

で、部屋に少女を入れようとしなかった。

——何で、いつまでもこんなところにいるの、何で、部屋に入らへんの。寒い——

少女は、じれったかった。災厄はまだ終わっていない。

少しずつでいい。早く次の段階に進まないと——

蛍光灯を見て過去とか未来とか、どうでもいいことに拘ってしまつて抜け出せないのは、いつまでもこんなところにいるからだ。

未来は遙か向こうにあるのだ。今から入る病室なんかではない。だが、飛び越えることはできない。ハードルを越えるように、一つずつ段階を踏まないと後ろに行つてくれないのだ。

——ここが部屋なんよ。手術が終わつてここへ来たんよ。こんな廊下みたいな狭いところが、今からずっといなければならない場所だなんて。

得体のしれない絶望が押し寄せてきた。天井に向かい固定された視点、そこから自由に泳ぐことのできない視点は、少女のものではないはずだ。視線が届かないために、天井を支えているが途中で途切れ、天井もろとも宙に浮いている壁、見えない床、力の入らない、あるのかないのかわからない、それでいて不気味な疲労感を湛えた身体、顔の上から降ってくる声、何もかもが理不尽で訳のわからない別世界だった。

どこかにあるはずだった。これは何かの間違い、ちょっと身体を縦にしてみたら必ず……得体のしれない不安に、少女は何とか身体を起こそうとした。たちまち上から抑えられてしまった。

——動いたらあかん

——起きるだけ。ちよつと起きてみるの

——起きられやんの。起きたらあかんの

少女のちよつぽけな自我を洪々宥めてしまったのは、上から吊り下げられて右腕に突き刺さった注射針を通してポトンポトンと液を落としている点滴、掛布団の下で腹部を覆っているらしい半円形の鉄板、腹部の膿を吸い取るために太いチューブで繋がれた吸引器……それらの見たこともない恐ろしいものだった。そして下半身の感覚は、まるで覚束なかった。

それが始まりだった。

そのときから、同じ場所、同じ空間、同じ視点が徐々に少女の日常に変貌していったのだ。

——私、もう死ぬわ。きつと、死ぬ

——そんなことないで。大丈夫や、死なへんから

——死んでく。怖い。今から、死んでく。怖い

時間もわからない夜の静寂の中、身体だけが地の底に落ちていくような不安の中で、自分とはとてもない嘘つきだと、意識だけは健気に抵抗を示していた。どうして心にも



ないことを口走るのだろう——少女は自分が死ぬなどとは思えないままに、死ぬ、死ぬ、と言いつつ続けた。言わずにいられなかった。映画やテレビのドラマでよく見た場面、母親や恋人の手に縋りながら死んでいこうとする人が右腕の辺りにうずうずと漂っていた。

少女は肉親に手を延べることはしなかった。腕に刺さった注射針の不自由さのせいではなかった。

あの人は、肉親や恋人の手に縋り、自分だけがあの世に行ってしまう怖さを、この世で未来に向かつて生き続ける手に訴えようとしていた。あの人は死んでいったのだ。私は死なない。あの人は何を思ったのか、そんなことは後で考えればいい。私は死なない……から。沈み込んでいく身体の代わりに、死ぬ、死ぬ、と天井に向かつて空砲を撃ち続けるのは何なのか——それも後で考えればいい。

どうしても後で考えなければいけない。そうしてから、死んでいきたい。それなのに、今からもう、身体は眠るよりももっと深いところ、二度と目覚めないかもしれないところに沈んでいこうとしている。今……死にたくない……。点滴の容器の中の液体を、少女は見ている。それは、漏斗状になった容器の底の斜面との境に差し掛かろうとしていた。一瞬の後、坂道を落ちていくように、加速度のついた液体が減って行くのが見えた。

——すぐ眠れるようになるからな

ら引き摺ろうとする。悪夢を終わらせまいとするのか、あくまでもこれが現実だとしつこくわからせようとするのか——。睡眠薬って効かないこともあるのだろうか。本当に睡眠薬だったのだろうか。

この狭い部屋が少女の慣れ親しんできた日常とどのくらい離れた距離にあるのか——不安はここにもうずくまっていた。

土砂降りだった。目に雨が当たり涙が出ていた。涙なのか雨なのかわからなかった。

片側一車線の、歩道もない国道の端に止まっていたトラック。自転車で走った下り坂。

土砂降りの雨の中をタクシーに乗せられたことは覚えていた。その前には、ほんの少しの時間を失い、気がついたときは、トラックの後ろに掴まっていた気がする。

腹痛が激しく、車が角を曲がる度に吐きそうになった。あのとときの吐き気は、一時中断され、身体はどこかにしまわれてしまっている。そんな気がした。

少女の日常は遠くに押しやられ、この部屋の現実だけが覆い被さっていた。少女は押し潰された。頭の中からやさしく膨らむものは、何一つなかった。

後になって徐々にわかってきたのは、膨らむもの、腹だけが理不尽に膨らんでくるのだった。

明け方になって少女は漸く少しまどろんだ。

少しの量の液体を容器の底に残したままの点滴の針を抜き、小さな注射液を携え、アルコールで少女の腕を拭きながら医師が言った。少女に言い聞かすような口調だった。注射を終えると、今度は少女の身内に向かって、こう言った。

——眠るのが薬ですよ。それしかありません

その意味は少女にはわからなかった。言葉だけが頭の中に残った。さっきから父と母が耳元で相談していたこと——睡眠薬の注射を頼んでみようか、と途方に暮れたように話していたこと——その願いを聞き入れて医師が注射器を持ってきたのだということだけが、理解できた。

眠るのが薬——眠りたい、と少女は思った。眠って目が覚めたら、この悪夢も消えているかもしれない。すぐに眠れる、と医師は言った。少女は待った。

目は見え過ぎ、耳は聞こえ過ぎ、神経は尖り過ぎていた。記憶の一切を断たれ、初めてこの廊下のような細長い部屋に連れてこられ目が覚めたときから、少女の頭は興奮が去らず、夢の入り込む隙間がなかった。

「一睡もできない」ことの、その言葉の現実の重さ、睡眠薬を打ってもらったはずなのに、目が冴えてしまうという事実——初めての経験というものは、いつもこんなに悪意に満ちているものだっただろうか。悪意は薬の効果も奪ってしまうのか。この部屋に充満し、不自然な緊張をひたす

「班田収授法」、「口分田」、「三世一身の法」、「墾田永世私財法」——社会科の教科書の欄外にそんな言葉が並んでいる。

ガラス瓶の中の洗腸の液体は、点滴の何十倍もの速度で水位が下がっていく。腹に入っていく。それは水ではなく、ぬるま湯だ。ガラス瓶から太いゴムの管を通り、肛門から大腸に一気に突き進む気持ちの悪い圧迫感。それをしてもらっているとき、頭の中をいつも同じ苦しげな言葉が泳いでいた。

浣腸をしてもらう。便を出したくなってもすぐに出してはいけない。薬だけが出してしまうのだと、出てきそうな便を我慢する苦しみの中にもそれは現れた。

どうして、そんな言葉を思い出すのかわからなかった。「はんでんしゅうじゅほう」、「くぶんでん」、「さんぜいっしんのほう」、「こんでんえいせいしじいほう」……読み方も、「班田収授法」、「口分田」、「三世一身の法」、「墾田永世私財法」……字のイメージも気持ちに合わない。苦しさには合っているのか。絡み付かれると苦しい。頭の中が苦しい。

大量のぬるま湯を注入したカエルのように膨れた自分の腹部を、寝ていても少女は見る事ができる。少しずつ、それでも薬になる。太いゴムの管からガラス瓶に逆流して



いくぬるま湯。ぬるま湯と道連れの腸から出たガスのポコツ、ポコツ、という音。ガラス瓶のぬるま湯は看護婦の手で逆さにされ、バケツの中に棄てられる。少女の目の位置からは見えない。おそらく、腸の中を通り抜けてきた汚れた水の中に、苦しい語彙が背鳍を光らせている。なぜか頭の中で泳いでいたはずの、あの語彙がバケツの中に棄てられていく。

食べなくても便はあるらしかつた。腸に毎日微量の老廃物が溜まるんです。新陳代謝で、腸から老廃物が剥がれるんです。極く少量ですから、浣腸しないと自力で出すのは無理ですからね。老廃物からガスも発生しますし、それでお腹がパンパンに張って苦しいんです。看護婦さんは言った。

看護婦さんはいろいろなことをしてくれました。熱気するか、と言って、かまぼこ型の熱くした鉄板を少女の腹の上を囲んで置いていく。一定の時間、腹部を温める。熱湯の中でタオルを絞り、腹に温湿布をしてくれる。熱気も温湿布も少女は苦しくなかったが、熱湯を入れたバケツでタオルを絞る看護婦さんは火傷するくらい熱いのだということが母と看護婦さんの会話を聞いてわかってきた。

少女が苦しいことは、看護婦さんは苦しくない。物事はどちらかが苦しいのだ。

はあーいと返事すればいいことなのに、と少女は思った。その戸惑いぶりを見ると、きつと大きな声が出せない人で自覚しているんだ、と察した。行先の病室は一応表示して来るんですけどね、母と話をしていた看護婦さんもいた。

少女の病んだ腹部は重く、まるで力が入らない。点滴の最中に苦しくなることが何回かあった。点滴の液が胃に溜まり過ぎて下がっていかないためと言われ、生々しいゴムの臭いがする細い管を鼻から胃まで無理矢理通された。医師は看護婦さんに指示する。ビッグ・ドレーン（出して）と。覚えてしまった。恐怖の言葉だった。蛇を飲むような気持ち悪さと恐ろしさに狂わんばかりに泣き叫ぶ少女を、手術をしてくれた老練の医師も、主治医の、大柄で引き締まった体軀、絵に描いたように精悍な顔貌の外科医も、動くことのない残酷さで少女を叱りつけながら、胃まで通し、古びた沼の水のような緑色の液体を吸い上げた。若いインタン上がりの先生が来たときは、管が鼻から抜けると同時に、さあ、これでジ・エンド、と悪戯っぽく言った。少女は楽になった。語彙はなかった。最初から現れもしなかった。

浣腸もそう。上からも下からも自力で出すことはできない。腹痛は頻繁に襲ってきた。下痢便を催すような兆候のもの

一週間で過ぎていた。

痛みはひっきりなしに押し寄せた。水一滴飲むことも禁じられていたため、一日に六本の点滴が少女の身体に打たれた。弱り切った心臓と体力に合わせてトロリ、トロリ、ともどかしいような速度で落ちる点滴は、朝十時頃から始めるが、夜更けになってやっと終わった。少女の手首は針の痕で紫色になって腫れ上がり、固く弾力のない板のようになつた。看護婦さんは腕の針をいちいち抜かず蓋を取って新しい液を足したり、容器の形態によつては瓶の底のコルクを取り替えて器用につないでいくようになった。

看護婦さんのウエストは皆一様に細く、淫漣と美しい動きをした。みんな明るい性格で、励ますように、若い娘らしいはしゃいだような声で、ときどき冗談も言つて忙しい人はササツといなくなつてしまふ。

ナースステーションの辺りから、透き通つた声で、まっつお（まつお）さあーんとか、いっけもつ（いけもつ）さあーんとか、どこにいるかわからない名前を呼ばれると、その声に負けないよく通る声で、はあーいと答え、走っていく。手が離せないよく通る声で、はあーいと答え、から出向いて来ることもあった。准看護婦として働きなから上を目指して学校に行つている学生が一人いて、おとなしい性格なのか、慣れてないからか、呼ばれると、あ、呼んでるわ、とモジモジするのだった。みんなと同じように、

のではなく、傷の痛みでもない、何がどうなっているのか、腹の中にカミナリでも入っているのか、カミナリのように大きく暴れ出しはしないが、何か得体のしれないものが息づいているかのように、やたら痛いのだった。

語彙が泳ぐ状況は決まっていた。いつしか、病院の空気に泳いでいたものなのか、どこかで拾ってきたのか、意味もわからない、「緑内障」という言葉が加わつた。「りよくないしよ」と、得体のしれない気持ちの悪い言葉だった。

十日が過ぎた。

暑い夏を感じる日があった。

依然として、一滴の水も許されず、母親が口の中にガゼで湿り気を与えてくれた。

ニッキ水のようなどぎつと透明な黄色をした点滴を、少女は見上げていた。光を水に合成したような色の点滴は、手術後すぐから毎日一本は注入されており、母が問うと、化膿を止める抗生物質が入っています、と看護婦さんが答えた。看護婦さんが、試すように針の先から吹き上げて見せたとき（何のためかわからないが、看護婦さんはいつも針を刺す前にその動作をした）本当にニッキのような匂いが零れた。

点滴は何度も刺すので、針を刺すのは段々難しくなり、液が漏れた部分の皮膚の下が青くなつたり、タコのように

硬くなったたりした。

少女は元々血管が細いタチらしかった。針が血管に入りづらいと、手の甲に刺したり、太ももに刺したり、足の甲に刺したり、腕から何と入る日もあったが、どうしても入らないと、看護婦さんの判断でそうした工夫が行われるのだった。

看護婦さんは外の世界から一日ごとに少女の憧れの夏を身に纏ってきた。カキ氷が食べられる夏本番はもう目の前に来ている。

今朝方、少女はひまわりの夢を見た。学校へ行く道の途中に、そのひまわり達は毎年咲いて立っていた。茄子やトマトの植わった畑の縁を飾るように、同じ方向を向いて、背の高いや低いや、それでもおおよそ背丈の揃ったそれは、同級生の少女達の群像のようだった。笑ってもいない、泣いてもいない、記念写真のように素直な一瞬を封じ込めたような群像。喜びも悲しみも取りあえず内側に秘めて澄ましていられる、健康な人達。違う方向を見ているのは少女だけだった。それよりも——少女はひまわりになれていなかった。群像の中にはいなかった。

少女の腹部にはまだ膿を吸い取る吸引器が繋がっていた。少女は何日も喉が渴いている。外は、夏の暑さも本格的になってきたようだ。母が水を含んだガーゼで口の中を浸してくるのも、ずっと物足りないままだ。喉が水を欲し

ている。喉に水を通したい。少女はニッキが嫌いだったが、黄色い点滴の液を今すぐ飲んだらどんなに美味しいだろうと思った。

母は、少女の頭の後ろの目の届かない場所で、スーパード買って来た薄いかき揚げの天ぷらをご飯に載せて食べている。何を食べているのか聞いたら、そう言った。

——こっちに来て食べるとこ見せて

——あなたがかわいそうと思って隠れて食べとんのにそれは健康な人間の思いだった。食べたくて、身体は食べられるのにお金がなかったり、痩せるために無理に我慢しているのとは違う。食べ物を見るだけで気持ちが悪くなるというのとも違う。点滴をしているので、空腹が酷いというのでもない。食べ物のない世界で天井ばかり見ているのは味気ない。十日も食べ物の姿を見ていない。食べ物の姿を見たいだけだ。食欲はあるのだ。自分が食べたら、胃の中がおぞましい緑色の液でいっぱいになって、吐くこともできない苦しみに悶え、またあの恐ろしい管を通されるのが少女にはわかっていて。

二日ほど前に、少量の水の許しが出た。一時間にお猪口一杯程度の水ならいいだろうと。お猪口一杯の水を胃に入れた後、次の一時間が待ちきれない思いがした。一途に時計ばかり気にして、水のことばかり思い続けた。水を許可した先生は、そこまで思い詰めるとは思わなかったのだから

う。結果的に飲み過ぎてしまったらしい胃の中に滞った重い水は、ビッグ・ドレーンを呼び込んでしまった。

醤油の染みだ薄い野菜の天ぷらは、母の歯の形に切り取られて丸い菌型がつき、小さくなっていく。少女は、自分が食べているような気になった。腹痛はあるが、食べない限り、吐き気はないのだった。

——看護婦さんの腰、みんな細うてきれいやけど、そんなも、あの子ら脚は太いよ。あんた寝とるで脚まで見えやんやろけど

母はさらに言った。

——看護婦さんは立ち仕事でよう歩いたり、忙しくて走りたりするから脚が太うなるんやな。あんたの脚、細なつたよ。歩かんでやな。脚は使わないと細うなるんやな。寝たきりだったひいおじいさんも脚は物凄う細かつたもんや。健康な人というもんは、脚は太うても、お腹の周りは細いもんなんやな

少女は看護婦さんの脚、膝から下の辺りは見えなかった。腹痛や身体の辛さ、苦痛でそんなことを感じる余裕もなかった。自分が憧れる夏は感じたが、看護婦さんを讃えるウエストの細さは思いもなかった。

少女はその日、母の口の形に切り取られた、野菜をかき揚げた天ぷらの絵を描いた。売店で買ってきてもらったボールペンはすぐに書けなくなった。不良品かと母が売店

に持って行ったらそこでは難なく書けたらしい。寝て書くため軸が上を向いてしまうので、インクが上にながっていかないのだとわかり、母は赤と青が半分になった色鉛筆を買ってきて削ってくれた。次の日はそれでオムライスの絵を描いた。

次の日も、その次の日も、少女は仰向けに寝たまま、食べたいものの絵を描き続けた。テレビで盛んに宣伝し始めたプリン、バナナ、カレーライス、ぜんざい、みつ豆、アイスクリーム、炊き込みご飯……。

——種類しか描かない日も、いくつか描く日もあった。

食べ物の絵が二十種類を超えた頃、流動食の配膳があった。固形物の全然ない重湯と濁った果汁と給食のよりも不味そうなミルクの黒い椀が三つ、気の滅入るような暗い表情をしていた。こういうものを少女は苦手だった。起きられないのでスプーンで食べさせてもらう。少女は一匙口に入れてもらっただけで、

——やらしい

——そう言って、そっぽを向いた。

食べさせてもらって、自分で食べられないと余計、気持ち悪いくらい不味く感じた。

黄色い抗生物質の点滴を飲みたいと思いつながら、既に失望を予想していたように、少女は安易に失望した。

——このミルクに卵を入れて卵牛乳にして。そしたら、飲む

通学の途中でよく見た、「タマゴ牛乳」と大きく書かれたトラックが、少女の脳裏を走って行った。

——先生に聞いてみないと

母は最初、卵の是非に躊躇していたが、結局少女の安易なわがままに勝てず、ミルクの中に卵を落としてかき混ぜた。卵の落とし方もかき混ぜ方も安易そのものだとして少女は思った。結果は同じだった。安易なことをするとしつぺ返しがくるのだ。「やらしい」卵牛乳を前に、少女と母は小さないさかひをした。安易な卵牛乳には憎悪しかなかった。予感があった。こうなるのは、わかっていた。

母も疲れていた。

何年も経ってから思い出したとき、結果的に生卵なんか飲まなくてよかった気がする。傷口が何かの菌に感染という事態になったかもしれない。

同じ姿勢で寝たままなので、背中が赤くなって痒かった。「汗疹あせもかなあ。天花粉つけたらええやろか。床ずれになったらかなわんなあ」

母が言う「床ずれ」という言葉は初めて耳にした。吸引器がついている身体を動かして背中への処置をするのは難しそうだった。

看護婦さんが慣れた手つきで吸引器に影響しないように身体を縦にした。消毒して軟膏を塗りガーゼを当ててくれた。

遠縁だという、二十代くらいの若い男性がパジャマ姿で部屋に入ってきた。この病院に入院しているという。

——偶然やなあ

母が言った。

偶然も偶然。遠縁の男性は少女と同じようにバイクで転倒して腸を破ってしまったという。事故は少女よりもちよつと後だったらしいが、もうほとんど回復しているように見えた。吸引器を見て、十日あまり一滴の水も飲めなかったこと、やつと流動食が出たこと、その他のことを母から聞いて、大変やったんやなあ、と男性は言った。

——僕はもつと簡単に治った。あの日は寝てなくてフラフラして、食事もしてなくて空腹やった。それがよかったみたいで、腸が空っぽだったから、腹膜炎にならなくて膿むこともなかったんだって言われましたよ

膿んだ腸に管を通して膿を排出しなければならぬほど、この男性はそこまで大事にならなかったのだろう。

少女は、あの朝、前日の夕食のうどんの残りを食べたことを、なぜか忘れていなかった。悲しい記憶として残っている。土砂降りの雨の中を自転車で学校に向かった。雨が

目を直撃し、強く目を打つ雨の衝撃で涙が出た。涙なのか雨なのかわからなかった。雨合羽の前は風に意地悪されているようにだけ、サージのスカートは雨水を吸って重たくなる一方で、何もかも不快だった。学級委員のユキちゃんが穿いているような、カシミヤのスカートだったらもう少しは軽いのだろうか、しょうもないことを思っていた。国道の下り坂、歩道を設けていない道の端っこに止まっていたトラックに激突し自転車のハンドルで右側の腹部を突き刺してしまふまでトラックに気づかなかつた。しばらく気を失ったらしい。外傷は全然なかった。中身だけが破れて腫んでいた。病院に運ばれたが外傷がなかったためわからず、数時間放っておかれた。虫の息になって緊急手術——。手術してからも助からないかもしれないと言われたという。

母はそんな話を男性にした。

虫の息——そんな身体の記憶はなかった。

母が病院に呼ばれて飛んで来たこと、「点滴」と聞こえた得体のしれない言葉が怖かった。

——下り坂で加速度がついていたんやけど、止まってるトラックにぶつかっていきなんて阿呆や、一緒に走っていたヒロちゃんはちゃんと避けて通って行ったのに

母は言って少し笑った。

四月に中学に入ったばかりのヒロちゃんは一学年下で、

隣の家に住んでいた。小学校も一緒だったが、中学に一緒に通うようになって二ヶ月余り経っていた。ヒロちゃんは先を走っていて、少女がなかなか来ないので戻って行って気を失っているのを見つけてくれた。トラックの運転手はその場になかったらしい。後日警察にも行つたけれど、電柱にぶつかつたようなもので、トラックの側に落ちた程度はないと言われた。男性に聞かれるままに、母はそんなことも話した。道路の脇にある家に助けを求めたのはヒロちゃん、その家で寸時寝かせてもらい、わけが分からぬまま腹痛がして気持ちが悪かつたのを覚えている。

——入り口の名札見えたけど、僕も主治医の先生は同じです。あの先生いいですよ。人気もあるし。ベン・ケーシーみたいで。

男性が言った。

——男前やしな

——確かにそれは大きい要素やと思うわ。けど、身体も大きくて包容力があるっていうか、人気というよりも信頼されてるから

——そやな。顔よりも身体大きくて、いかにも外科医っていう感じがええな

ベン・ケーシーのような精悍な、国語の先生がベン・ケーシーは精悍な顔と言っていた。でもあの先生はコートのよいうな裾の長い白衣を着ている。ベン・ケーシーのような短



い白衣を着ているのは、インターン上りの若い先生だ。少女は思っていた。先生が、お母さんには感謝しないといかんよ、と言ったこと。出来過ぎ、と思った。母は喜んでたようだった。病室用に買った新しいスマートな扇風機を前前の主治医の先生が、最新型やな、と言ったときも母は褒められたと喜んでた。

食べ物の絵が三十種類を超えた頃、少女の身体は軽くなった。重湯の中にわずかな米粒が入り、三分粥、五分粥、七分粥と少しずつその割合が増えていった。全粥、軟飯、常食と続くらしかった。朝の八時、正午の十二時、夕方の四時になると、廊下に賑やかな配膳車の音がして食事を配るおばさん達の元気な声が出た。

○さーん、五分粥

××さーん、全粥

△△さーん、流動

と、紙にでも書いたものを確認しながらやっているような雰囲気だった。△△さん、何日流動食が続いてるんだらう、何の病気だろう。少女は思った。優越感を感じずにはいられなかった。

廊下からは、他にもさまざまな声が聞こえた。村田英雄の「皆の衆」に「トマトは安い」と替え歌を自分でテープレコーダーに吹き込んだらしいのを流してトマトを売る声。

れて、どうしてそんなになってしまったんだろう。

反対側の病室からは、くーちい、くーちい、と女の人の声がかきとき聞こえ、喉の大変な病気でもあって発音がでないのか、苦しいと言っているのか、と思ったがいつの間にかいなくなつて、おじいさんらしい患者が代わりに入つたよう、テレビを持ち込んでドラマを見ているのか水戸黄門の陽気な主題歌が大音量で聞こえてきた。

廊下の角のスペースにあるらしいテレビからカレーのコーマーシャル・ソングがよく流れてきた。カレーの名前にそのまま節をつけて、

——おーりえんたるカレええーって言うてる

母が真似して歌った。

私がおんなに苦しいのに世の中はあんなコーマーシャルを流して毎日が楽しそうに動いていつてる。少女は何度もおかしいと思わずにいられなかった。

ある夜、少女は母の手に助けられて、そろそろとベッドの上で上半身を起こした。

夏の夜の蒸し暑さのどこに潜んでいたのか、冷気が垂直になつた少女の背中を急激に襲った。

今まで確かにあつた水平の世界を否定し尽くして、厳然と屹立している垂直の世界が、本当に正しいものなのか、少女にはわからなかった。水平になろうと抵抗しているの

トマトを売って歩く男の姿が想像できた。トマトが食べられるといい、と何となく思った。

流行っていた流行歌の引き付けられる部分の四小節のメロディをいつも口笛で吹いて通り過ぎていく患者らしい男。あのメロディによほど引き付けられて吹いているんだな、と思った。「うるさいわ、同じことばっかピイピイ」と女の声が聞こえたこともあつた。

腹部から吸引器が外された。ゴムの管は数センチの長さを残して切り取られ、残された部分は、まだ傷口から腹の奥に埋まっていた。ゴムの管の先から完全に止まっていないう微量の膿は、ガーゼの交換だけで処理できるようになった。寝返りも打てるようになった。

ガーゼの交換をしてもらっているとき、部屋に別の看護婦さんが入ってきた。先の看護婦さんはガーゼの交換をしながら

——ゆうじろう覗いてあげてくれる。後で行くから

と言った。ゆうじろうというのは隣の部屋の五歳の男の子で、本名ではなく、名字が人気の映画スターと同じなで看護婦さんの間でそう呼んでいるらしかった。

盲腸（虫垂炎）が手遅れになって膿んでしまつて人工肛門になつたんやて。五歳やのにかわいそうに、と母が言っていた。お母さんから聞いたらしかった。

隣からはときどき泣き声が聞こえた。五歳やのに。手遅

は、少女の上半身の内容物だけだった。頭に血がなくなつていく。無理に挑戦するように覗いたベッドの下は、吸い込まれそうになるほど深かった。寒いと思つたのに背中が急激に暑くなり、びっしりと熱い玉の汗を少女は背中に着ていた。

——お前は起きようなどと思つてはいけない。一生寝ていなくてはいけない

そんな声が聞こえた。

——気持ち悪い……

堪えきれず、少女は元のように倒れ込んだ。背中汗と、目をつむつてもまだ目の前が暗い記憶が微かに残る頭の中の残像と、深い疲労感がなぜか唯一の慰めのように少女には感じられた。起きようとしなければいいのだ。ずっと、寝たままで、何も食べずにおとなしくしていたら、生きていられる——

——立ち眩みやな。毎日ちよつとずつ練習したらええやろ微笑みながら、母が言った。

——手術したときは、どうなるかと思つた。助からんかもわからんて言われて

少女は思い出していた。ちよつと廊下へ来てくださいい、と主治医の先生が父と母に言った。手術が終わつた晩だったかもしれないし、一日くらい後だったかもしれない。やっばり、あのとき——。そのとき、少女は、ドラマでは

そういうこともあるかもしれないけど、と思っただけだった。

「立ち眩み」——それは何だろう。今みたいな目の前が真つ暗になることをいうんだろうか。お母さんは何でそんな言葉を知っているんだろう。何でも知っているみたいにな落ち着いていられるんだろう。今みたいになつたことがあるんだろうか。「日にち薬」という言葉も初めて聞いた。見舞いに来た人が「日にち薬やな、まだ若いし」と慰めを言い、母が同意していた。日の経過が薬と同じ効果をもたらすという意味らしかった。「床ずれ」という言葉も——。

ひまわりの群像。

名前も顔もわからず、クラスメイト達が目の前をぞろぞろと通り過ぎていった。誰も少女の方を一瞥もしなかった。彼らには別の道が用意され、皆はそこを脇目も振らず歩いて行くようだった。

五十年が過ぎた。あれから五十年生きた。今も生きている。

初夏の早朝、六月の午前四時頃の夜明けはワクワクするし、音楽の教科書に出ていた絵、線路のカーブに沿った曲線の列車がトンネルに入ろうとしている。窓から手を振る男の子の麦わら帽子、昔歌った懐かしい夏の歌、推理小説で読んだどことなく夏っぽい感じのする東海道線、静岡

の函南という場所を通る電車の中の若い女性の夏服の情景、その他いくつもの絵が頭の中に詰まっているが、メロデイも情景も言葉にできないせつない感触を運んでくる。それでも、老いを感じる身体にとって真夏の暑さは耐えがたいものになつた。

十四歳は遙か遠く、少女はおばあさんになつた。あのときの身体の辛さはすっかり忘れてしまった。苦痛をリアルに憶えていたら、生きることに自信が持てなくなって生きていられないだろう。

暑いときに喉を潤す。思う存分水分が飲める幸福感は何物にも代えがたいと、それだけはリアルに実感する。

それでも、生きることから逃げたくなくなることがあると、その都度、死にかけてあのときを思った。

災厄はあのときで済んだわけではなかった。人生波乱万丈だった。

一ヶ月後、病院内を散歩できるようになり退院も近いと思われた頃、腹部に違和感を覚え腹痛を感じた。腹痛は徐々に耐えがたいものになり、その夜、吐き気もきた。腹痛も吐き気も激しく、吐くものがなくなっても吐いた。吐き気は五分おきのインターバルの小休止があつたが、ひつきりなしの激痛の方が耐えがたかつた。死んだ方が楽になれると思つた。二度目の緊急手術が行われ、隣の家のヒロちゃんのお父さんが輸血に駆けつけてくれた。母の血と二

人のものをもらった。一回目の手術のときは売血を使ってもらった。無事に済むとビック・ドレーンを胃から鼻に装着したまま手術室から運ばれ、丸一日挿入されたままだった。退院が遅びたが今回の術後の回復は早く、ドレーンが抜かれてからは、さほど苦しみを感ずることもなく一ヶ月

後には退院することができた。一回目と合わせ開腹手術痕の二本の歪な線が残った。長期間、腸に管を挿して膿を排出していたために管の周辺が脹れ、腸が詰まって腸閉塞を起こしたということだった。手術で腸にパイパスをつけて通るようにしたと、外からはわからないけれど、そう説明を受けた。

十一月から学校に通えるようになった。教科の様相はすっかり変わり、未知の内容が目の前に広がっていた。数学は図形の証明、英語は小泉八雲の「怪談」、国語は漢詩という分野「春眠暁を覚えず」などやっていた。社会は奈良時代から昭和の世界恐慌にワーブしていた。

波乱はあのときで終わったわけではなかった。幸運にも身体には、大した異変も起こらず、この歳まで生きてこられたが、さまざまな問題に攻め立てられた。こんなことなら、あのとき死んでいれば——と本気で思つた。そう思うことは少なくなかつた。

人並みの苦勞がでせず、してこなかつた。異性と暮らし赤ん坊を生み育てること。誰もがする人並みの苦勞をし、

自分のためだけに生きるのではなく、誰かの役に立つこと、同じ立場の人達の共感の中で生きること——それは安らぎのほずであると思つたが、その道を歩めなかつた。ひまわりの道を歩めなかつた。

「人間の家はな、病人が一人出るとみんなが大変な思いするんや」と言つていた母。あのときあまりに世話を掛けて、命を助けられ、感謝しなければならぬ母に、裏切り行為をする事態も起こってしまった。家に残つてある人と結婚してほしいと強く言われたのに、黙つて出てきてしまった。母の思いを無視した。その人が好きになれなかつた。十年目の春だった。大きな転換点となり、罪悪感と言ひ訳が今も残る。

今となって人を傷つけたことを折りに触れ思い出してしまふ。それがあまりに多い。そのたびにあれは本当に自分だったのだろうか、と自分に違和感を覚える。今だったらあんなことはほしくないのに、と思うが、罪であることには違いない。母を裏切つたことはでもそれとは違う。あれは自分だった。今でもそうしてしまふだろう。

「あんたは病氣してみんなに迷惑かけといて逃げていった」

母は言つた。罪には違いない。罪悪感とともに自分があ

る。悪いことをしたのに難を逃れた幸運を悪運が強いと言う

のだろうか。結局、悪運が強いのだ、と呟く。本当の意味はわからないけれど、私にとって、悪運が強いとはけつして幸運に結びつくのではなく、罰を受けるために生かされること、と思わずにはいられない。

子どもを産んで苦勞して育ててきたある友人から言われてしまった。「その考えは間違ってる。悪運が強いというのは、そんなネガティブな意味じゃない」と。

「うん、知ってる」そういうしかない。心の中には別の言葉がうごめいている。あれから後のこと、裏切りのこと、悪運として罰を生きること、波乱ばかりのこと、まだ続きそうなこと、それらを考えると、あのととき死んでいけばよかったと何度も思った。

相手は続ける。

「それより、死んでいればよかった、と思うのとは一番の裏切り行為、最大の親不孝だ」と。

そうかもしれない、と思ったが、「生まれてきたくなかった」というのが本音だった。悪運を生きること、その辛さを生きることが、あなたにはわからない。心の中で違うものがうごめいていた。

### 銀華文学賞 受賞の言葉 森本あさ子

波乱の人生だったと思います。小説は好きで書いてきましたが、自分の体験など書くのはダサイとの思いから、二〇〇枚、五〇〇枚の作り話を書き新人賞に応募していました。でも、書き始めるのが遅かったせいか、年齢で無視されている気がしてなりませんでした。

あまりに無視され続けるので、自らのことを、短いもので書く気になりました。枚数もちょうどよく、文芸思潮さんなら受け入れてくださるのではないかと思います。

全然自信がなかったといえは嘘になりますが、連絡をいただいたときはびつくりしてしまっ、その後どんどん信じられない気持ちになりました。読んでくださり選んでいただいたことを感謝、掲載にあずかり、今後の読者の方々の存在が何より嬉しく思います。



森本あさ子

1951 三重県生まれ  
愛知県豊橋市在住  
短大国文科卒業  
国立大学事務職員を定年を待たず中途退職後、アルバイト多数  
うち、郵便局に十年以上アルバイト勤務  
現在はセルフのガソリンスタンドでアルバイト

## 短編小説集

# 雪女郎

# 原石寛

原石寛氏の作品を読むとその後に立ち上がってくるのは、華やかさの流れの底に沈んでいった美しいものの宿命である。美しさの陰に潜む残酷さである。無数に散り、踏みしだかれて埋められていったものの姿が、三味線の音曲に乗って乱舞する。氏の文学は、生身の女性の美しさとそれを追い、滅んでいく者への鎮魂であり、憎しみと呪詛をも含んだ人間の美の影への鎮めであろう。

——五十嵐勉

アジア文化社

原石寛畢生の短編小説集  
1600円(税込/送料共)  
御注文はアジア文化社まで



## 再出発

内田東良

1

朝起きると書き込みのできるカレンダーの日付に丸印をつける。長いことサラリーマンをやってきた男には日付と曜日の確認は欠かせない習慣だ。

独り身が五年にもなると食事の用意も手慣れたもの。オーブントースターにパンを入れ、フライパンにハムと卵を落とす。食事の前に窓際の鳥かごに水と餌をやる。ペランダには鉢植えの黄色いフリージアの花が最盛期を迎え、陽光に向かって花びらが自己主張している。そこにもたっぷりと水をやる。

園芸が趣味の隣人から時折、鉢植えをもらい受ける。花が咲くと、あざやかな色彩と季節の香りが心を癒やしてく

れる。

出来立てのトーストとハムエッグを食べながらコーヒーを流し込む。時間はたっぷりあっても食事のスピードはまだ衰えていない。

今週はまだ人と会話を交わしていないと気づく。

宇佐美剛毅は六十歳の定年を機に妻と別れた。その半年前に妻から申し出があった。妻の真意は分からなかった。不可解であってもそういう意思表示を受けた以上、修復を図ろうとするのは意味のないことだ。相手の意思を尊重することも愛情の表現だ。

第二の人生のスタートに定年は好都合。そう前向きに考えた。ひとり娘は嫁いでいた。娘は母親にべったり。新居も福

岡の実家の近所で何かと母親を頼りにしていた。

家を出て退職金の一部で購入した孤島の一軒家に移り住むことにした。かつてリゾート開発が盛んであった頃、建てられた別荘である。分譲当時の十分の一の金額で売りに出されていたから、第二の人生をここで過ごす老夫婦も何組かいた。

生まれも育ちも南の島国であったから海に囲まれた生活は肌に馴染んでいた。が、故郷の島に戻ることは躊躇ためらわれた。

財産分与した家を出てからしばらくして娘夫婦が実家に同居した。そのときは娘からメールがあった。家賃を払うのが馬鹿馬鹿しいから効率を考えてママと一緒に暮らすことにするとある。そのほうがパパも安心でしょ、と笑顔マークの絵文字があった。

それ以来、妻子からの連絡は途絶え、五年が経過した。娘の誕生日などにお祝いメールを送ってもそれへの返信すらない。

家族のために全力で仕事に邁進してきたつもりだったが。別れ際に妻からは家族のためと思っただけのはあなただけと言われた。

移住した当初は好きな釣り三昧の日々を送った。近所の家々に釣果を配り、喜ばれた。お返しに奥さんの手料理を振る舞われた。

2

週に一回、島に立ち寄る周回船で買い物をした。海上タクシーを使えば、本島まで三十分で行くことができた。本島には診療所があって、健診のときや風邪などの軽い病気のときは気軽に利用することができた。

本島の整形外科に行く。朝九時にはもう満員。待合室には座る席もない。駅の待合室のように長椅子が何列か並べられてあり、老人たちが背中を丸めてきちんと座っている。島に居住する高齢者が全員集合しているかのようだった。

受付を済ませたら職員の女性が補助椅子を出してくれた。前回来たときにもう少し早く来院しようと思ったのに忘れていた。最後に座って前を眺めると修理の順番を待つ小型の丸い中古車のようなのだ。

延々と待つ。

正面の受付の整形外科医院という文字が自動車修理工場という文字に変化する。もう一度目を凝らすと高齢車修理工場になっている。

古い車が順番に工場に入庫する。忙しく立ち回る工員たち。工場の親父が車の修理箇所を点検している。あれこれ言う工員たちは油をさしたりネジを締めなおしたり塗装したりしている。

古ぼけたピンクの車がエンジンやバッテリーを代えて塗装しなおすように嘆願している。

昔の男友だちに会うから新車の状態にしてくれと食い下がっている。

とても無理という仕事をしする工具。それでも粘るピンクの車。親父が腕を組みながら出てくる。

「和木葉子さん、オタクは経年劣化が激しくて元に戻す修理は無理です。新車のときのように戻すなんて不可能です。まあ一応見かけだけは補修しておきますよ」

親父が古ぼけたピンクの車に話しかけている。嘆く相手にたいしてさらに続ける。

「あなたがたの年代はもうボンコッなんですよ。ほらご覧なさい。あなたと製造年度が同じグレーのあの車だって応急措置しかできないんですよ」

親父が指をさす。明らかに自分をさしている。怒りが一気に爆発する。

「人に指をさすな！ ボンコッ呼ばわりは失礼じゃないか！」

宇佐美は思わず大声を出した。周囲の目が集まる。老人たちの冷たい目。何も変わらない整形外科医院の待合室の光景が戻ってくる。目をこすつて下を向いた。

名前を呼ばれて診察室の前の長椅子でも待つ。名前を呼ぶたびに医者顔を出す。観察していて気がつく。患者に

ベルトコンベアのように追い出される。ここは老人が集まる修理工場であった。

少し軽快になった感じがする右肩を大きく回した。

## 3

大事なイベントがやってきた。

故郷の島の旧友たちとの懇親クラス会だ。その島には空港もあり、東京、大阪、福岡などへ定期便も飛んでいる。

孤島で一人暮らしする様を高校時代の親友に知らせたのがきっかけで案内をもらうようになった。居住する島から本島へ、本島から船を乗り継いで故郷の島へと向かう。

高校のときのクラスメイト有志の会は気兼ねなく参加できる。世話役の宮里みやざとの骨折りで年に最低一回集まっていたのだ。宮里のようなボランティア精神に富んだ男がいなければこういう会合は続かない。

いつもの参加メンバーのうち十名が集まった。男六名、女四名。参加した人は若い。卒業して四十七年が経過した。ここに来られた人たちだけが四十七年前の青春を実感できる。そうだ。青春時代を語るときはみんな当時の若さを取り戻す。ここでは過去を語る人は明るく、未来を語る人は暗い。いつからこんな現象になったか、思い出せない。

男の場合、社会での活躍の先行きが見えた頃だ。逆に言

よって医者の表情が変わる。大半を占める老人のときは柔和な表情をしているのに若い患者のときは表情が一変する。厳しい鋭い目つきになる。病に対峙する医師の顔だ。

若い来院者には治療しようとする専門医師の顔。老人には治療を放棄したような柔和な顔。患者が高齢になればなるほどえびす様のような笑顔になるのだ。

「宇佐美さん、どうぞ」

柔和な笑顔だ。わが身の年齢を知る。

一週間ぐらい前から右腕を上にあげようとすると痛みが走るんですと症状を訴える。前回来たときは左足に痛みがあったんですが、それは軽快しました、と付け加える。

医者は終始にこにこしている。分かりました。それでは今日は右腕に電気マッサージしましょう。加齢による症状と思いますので長くお付き合いする気持ちでいてください。

その間、三分。お大事にという声だけ残して次の人の名前を呼んでいる。そばで立って待機していた看護師がマッサージルームの前の長椅子まで誘導する。看護師の表情は無表情。広い牧場のなかで羊を一頭ずつ誘導する人のようだ。マッサージルームは施術室という看板があつて、そこにスポーツジムのような器具が並んでいる。器具には見事に老人が張り付いていた。

白衣の施術師が来て、電気マッサージ椅子に座らされる。電気振動パッドを右肩に二十分。左肩に二十分。済んだら

えば、手がけている仕事のその先の光が見えなくなったとき、男は未来を語らなくなる。

女の場合、年齢や状況に関係ない。明るい人は明るく語り、暗い人は暗く語る。

ところが六十代中頃になると男も女も未来を語らなくなる。急速に訪れる衰えが老化を実感させる。消え入る命の炎が現実に見えてくる。

毎年の会合はお互いの老化を確認する場となる。健康と病気が最大の話題になる。誰かが亡くなったという情報を聞き、次はわが身かと怯える。

大勢で話すときは明るく、二人だけで膝を交えて話すときは悲しい物語が吐露される。

女の一人息子は三十八歳になっても引きこもりで家から外に出ず、もう一人の女の次男はいまだに都会でフリーターをやっている結婚していないという。

男の娘は結婚はしたが、夫の家庭内暴力で孫を連れて実家に戻ってきた。もう一人の男の配偶者は脳溢血で倒れて植物人間になりいまだに入院している。どの人もどの人も悲しい物語を抱えている。それでもここで口にできる物語はまだいいほうなのだろう。

そのことを聞いても宇佐美にはどうすることもできない。だから一生懸命、心から耳を傾ける。そして頷く。相手が泣けば一緒に泣く。

それは悲しみの津波が繰り返して襲ってくるかのように仲間  
の気持ち揺るがす。どうしてこうも生活力のない息子  
や娘が多いのかと嘆き節が聞こえてくる。

自分の若かった頃は親から援助を受けようと思ったこと  
さえなかったと嘆息する声。

悩み苦しむ人たちに宇佐美は同情する。同情することし  
かできない。一人暮らしの自分の境遇はまだいいほうなの  
かもしれないと納得する。

こうしてクラス会はお開きを迎える。宇佐美は不思議な  
ことに気がついた。幸せな時間を過ごしている人はほとん  
どいないのにみんな思いのたけを言い合うと元気になるの  
だ。明日のパワーが湧いてくる。一方的に聞き役に回った  
宇佐美でさえそうだ。心の中が温かい。みんなに感謝した  
い。持つべきものは友だち。青春時代を共有した友だちだ。  
最後に肩を組んで校歌を歌う。まだまだおれもやれる、  
宇佐美は自信を持った。

## 4

クラス会の翌日、出航時間までの間、久しぶりに故郷の  
公園を散策する。

公園には大きな池があつてその池に流れ込む小川に沿っ  
て遊歩道も整備されている。春の陽気のいい平日であれば

役所の高齢者健康診断を予約していたので本島の診療所  
へ出掛ける。高齢者健診だけあつて老人が列をなしている。  
パジャマのような白衣に着替えて健診のベルトコンベヤに  
乗る。身体測定、尿検査、血液検査、レントゲン検査など  
おなじみの検査をこなす。最後は医師の本日の検査結果の  
仮診断だ。

着替えて昼食を済ませ待機する。健診の目的は当面の健  
康に問題ないとお墨付きをもらつて安心することだ。名前  
を呼ばれる。四十歳くらいの若い医師の前の椅子に座る。  
医師の右横のボードにはレントゲンフィルムが張り付いて  
いる。メガネの奥の目が鋭い。開口一番だった。

「レントゲンをご覧ください。肺の部分です。白くなって  
いる箇所がありますね」

「はあ、何か問題が？」

「肺炎ですね。精密検査が必要です。早急に」

「悪いんでしょうか？」

「肺炎の状況を詳しく診る必要があります。大病院にある  
CTで検査します。治療は病態を特定してからになりま  
す」

医師は検査入院が必要になるかもしれないと言いつつ、  
一ヶ月前にクラス会で出掛けただけの故郷の島の総合病  
院名を告げた。医師の冷徹さに宇佐美は躊躇った。事態の

老人たちが散策を楽しんでいる。

すれ違う見知らぬ人からこんにちはと声をかけられる。  
年をとるとそんな何でもないことでも心に染みる。池には  
カモがいて二羽ずつ対になって仲良く水辺を横切る。

宇佐美はベンチに腰掛けた。カモに餌をやるために朝食  
のトーストの耳を持参した。細かくちぎって池の中央に向  
かって投げる。カモたちがわれ先にパンくずに群がる。縄  
張りを侵食されたカモは怒ったように外敵のカモを追い払  
う。わずかなパンくずで彼らの秩序が崩れ仲良しと思われ  
たおしどりカモどうしでさえ喧嘩が始まる。

餌を投げるたびにカモたちの騒動が始まる。いつのまに  
か集まってきた園児の歓声がある。宇佐美は芝居の演出  
家のようにカモを操り、観客の喝采を浴びる。

この光景は何かに似ている。手に入れたものに血相を  
変えて殺到する生き物の群れ。貪欲な人間ども。パンくず  
はお金か地位か守るべき家族か。餌に殺到するカモの勢い  
は止まることがない。投げ入れた餌が価値のすべてと勘違  
いしたカモたち。ちっぽけで価値のないパンくずに拘って  
いた若き日の自分のようだった。

最後の餌を池に投げようとして周囲を見ると観客の姿は  
消えていた。

## 5

深刻さが感じられたからだ。

「ご希望なら他の病院を紹介してもかまいません」

「その病院でお願いします」

医師は頷いて、「紹介状を書くので待合室で待つてくだ  
さい」とパソコンに向かったまま小さく息をついた。

受付で紹介状をもらつて会計をする。

「先生から一応入院の準備をして、受診するようにとのこ  
とです。お大事に」

職員は申し訳なさそうに頭を下げた。

海上タクシーで住処に戻る。一人暮らしの小さな空間が  
天国のようだ。誰からも文句も指図もされない。自由とい  
う贅沢は健康があつてのことだ。

件の総合病院に受診の予約をした。

とりあえず入院の準備をする。部屋の中を綺麗に片付け  
る。鳥かごの小鳥が危機を察知して騒がしく鳴く。長い間  
孤独を癒やしてくれた小鳥に礼を言って、逃がした。

三日後に重苦しい不安という荷物を背負って、船を乗り  
継いで指定された病院へ行つた。

初診の手続きをしてCT検査室の前の長椅子で待つ。検  
査終了後、呼吸器内科の外来に行くよう指示される。一時  
間ほど待つてようやく診察室に入る。

白衣の男がCTの画像をボードに並べている。医師は余  
計なことを言わずに要点だけを説明する。



「間質性肺炎と思われれます。さらに病理的検査が必要です。早速入院手続きをとってください」

入院という言葉が独り身にとってこれほど重いことかと思ひ知らされる。

「入院はどのくらいになるのでしょうか」

「検査入院は一週間ですが、そのまま入院継続になる可能性があります。入院期間の目安はそのときお知らせします。入院はこの病院でいいですか」

医師は入院の承諾を得ようとする。あくまでも患者の意思による入院なのだ。小声で受諾の意思を示す。

「それでは明日の入院になりますので窓口で手続きをしてください」

医師の表情は穏やかだった。そんなことでも患者は安心する。

が、医師は独裁者だ。人間の自由も人権もなきが如し。宇佐美の人権はその日から剥奪されたのだ。

恐れていたことだった。生きていけば古いも病気も避けられない。死ぬことよりも病に伏しながら生き続けることをもっとも恐れていた。医師はCTの所見だけでかなり自信を持っている。検査入院で予見された罹病を確認し、引き続き治療のための入院になると覚悟した。

入院事務窓口へ行って説明を受ける。

「入院の際にご準備いただくものが一覧表になっています

ので、チェックしながら用意してください。明日の入院の当日にご持参いただきますのでよろしくお願ひします」

甲高い声の若い女子職員。色白で優しそうな目にポニーテールの髪が良く似合う。準備する書類のなかで一つ引つかかる。

「保証人、身元引受人の署名捺印の書類ですが、これがとれなかつたらどうしますか？」

「今お話したばかりですので宇佐美様のご家族、親戚・知人・お友だちなどに当たってみていただけますか。ここは事務の窓口ですのでご心配な点がございましたら医療事務相談室へ行ってください」

どうしても無理だったら、という言葉呑み込んだ。事務職員にはこれ以上の対応はできないだろう。一層の重荷を背負うことになった。

娘とはここ五年ほど音信不通だ。保証人を頼める近しい友人・知人などいない。しいてあげれば高校のときの宮里だが普段付き合ひがないのに突然こんなことを頼むのは非常識だろう。両親は鬼籍に入り、一人っ子の自分には親戚もない。

郷里の島を人捜しでさまよい歩くのか。それはできない。明日の入院に備えて、今日の宿を予約した。

ホテルにポストンバッグをおろしてから病院に引き返すことにした。医療事務相談室に行ってみる。医療事務相談

は気が引ける。しかももっとも親密と思われた男から謝絶されている。

特に女性への依頼は失礼だろう。旦那さんがいる女性ならなおさらだ。

過去に二度ほど入院したことがある。虫垂炎のときと食中毒のときだ。そのときは妻子が伴ってくれた。身元引受けは妻だった。それが当たり前のように心強い相棒になってくれた。

今回はたった一人。心の中をすきま風が吹き抜けた。

三十数年も社会人として仕事をしてきても入院の手続きさえ打開する方策が見出せない。こうなればこの結果を当日の朝に病院に伝えるしかない。

考えてみれば、宇佐美ほど病院にとって厄介な患者はいないかもしれない。万一亡くなったとき、誰が遺体を引き取るというのだ。誰が弔ってくれるというのだ。

都会に長年住み続け、社会から退いたら、自然の中で気ままに好きな釣り三昧をするために、たった一人で離島にやってきたのだ。

今、もっとも親密な人。離島の隣人の小早川夫妻を思いついた。

入院するから当分家を空けると伝えて、家の鍵さえ預かってもらっている間柄だった。家を出るとき奥さんから優しい言葉を頂戴した。

室には先客がいた。乳児を抱えた若い女性だ。事情は分からないが悲しそうな顔をしている。入院費用という言葉が聞こえてくる。仕切られた相談コーナーに案内される。相談員は中年の女性。物腰は柔らかい。近年病院では接客サービスの向上が著しい。単刀直入に現在独り身の状況で保証人の確保が難しいと訴える。先ほどの若い事務員と同じようにまずは心当たりをあたってほしいという。相談員は一般論と断つてこう言った。万一患者様が亡くなったとき身元の引き受けはどなたがされるのでしょうか、そういう観点で勇気をもって行動してください。

相談員が言うのも頷ける。病院は人間の死にもっとも近い施設だ。ただ勇気をもってと言われても勇気は湧いてこない。事態は好転せずにまたホテルに戻った。

勇気を持って……娘にメールをした。即返信があった。送信不受信のメッセージだった。アドレスを変えたのかもされない。

次に友人の宮里に丁寧な依頼のメールを送った。宮里からは保証人というの引き受けない主義という返信メールがあった。追伸として宇佐美の病状を察し、保証人以外の手伝いは何でもすると書いてあった。

勇気をもって行動した結果がこうだ。

一ヶ月前にクラス会に参加したのは自分を含めて、十名だ。残りは、男女それぞれ四名になる。順番に連絡するの

しかし期待をかけていただけに気持ち沈んだ。

——宇佐美さんが病院の入院代を払えなくなるとは思いませんが、身元引受けの保証については人間誰しも起こりうることでですのでご辞退させていただきますたくよろしくご了承くださいます。

当然の帰結だと思った。反対に小早川氏に亡き後の遺体の引き受けを頼まれたらお断りするだろう。ただの隣人なのだから。

ホテル周辺は繁華街だ。飲み屋街をうろつけば知り合いに出くわすかもしれない。その知り合いに泣きつくか、浴びるほど地元の酒を飲んで、倒れ込みたい。そういう欲望に駆られた。

が、入院の前夜の飲食は禁じられているのだ。身元保証の有無以前に入院を拒否されるに違いなかった。

眠れそうになかったが、することもなくホテルのシングルベッドに横たわった。

見知らぬ電話番号が携帯電話の画面に表示された。振動が伝わってきた。

「遅くにすみません。下地しもじです。宇佐美さんでしょ？もう寝てた？」

親しげな女性の声だった。下地、下地、下地、頭の中で繰り返す。聞き覚えのない名前だった。

「下地さん？」

フロント背面の掛け時計が夜九時を告げた。ゆっくりとソファに座った。

下地美智子、彼女と一ヶ月前のクラス会で何を話しただろうか。二人で折り入って話し込んだ記憶はない。

高校時代、バレンタインデーにチョコレートをもらったことがあった。嬉しかったが、それだけだった。母がお返しのお菓子を持たせてくれた。それも素っ気なく渡した。そのときの彼女の笑顔が浮かぶ。そのエピソードもそれで終わった。宇佐美は次の行動に移さなかった。

当時、和木葉子というクラスメイトの女神が宇佐美の心の内に住んでいたからだ。

もし当時のエピソードの心境が甦って、今の彼女を駆り立てたとしたら母のお陰というしかない。

先日のクラス会、世話役の宮里は各自に近況報告を求めた。

報告者は立ち上がり、島での暮らしぶりを話す。それは生真面目な高齢者のありふれた日常生活だった。

宇佐美は孤島の孤軍奮闘物語を半ば自慢げに話した。「故郷の田舎の島を抜け出してから都会生活が長かったですからね。離婚して自由になったときかねてからの夢すべてを実現しました。大好きな魚釣りでは、我が家の二階から釣り竿の長い糸を海に垂らすと鱈、鯖、キス、鯛など夕食のおかずがすぐに調達できます。近所の方は自由人ばか

「下地美智子よ。高校の同級生の。一ヶ月前のクラス会で会ったじゃないの」

記憶が一気に蘇った。起き上がってベッドに座っていた。「いまだここに居るの。島に来て居るんでしょ」

「どうしてわかったの。宮里に聞いたのか」

「宮里さん？ 彼から連絡はなかったわ。実はね。うちの娘が総合病院の検査技師をしているのよ。うちは主人が亡くなって、母娘だけだから娘が今日一日にあった出来事を何でも喋ってくれるの。先日のクラス会の出席者の話も全部話してあったから、宇佐美さんって人、ひよっとして母さんの友だちじゃないかって」

記憶はおぼろげだが、CT検査室で若い女性スタッフが検査前に「宇佐美さん、宇佐美剛毅さんですね」と名前を確認して検査の手順を説明してくれた。その人が下地美智子の娘だった。

感情が昂ぶってきた。今日の出来事を幼子がまるで母親に報告するかのようにな彼女に伝えた。

彼女はこう言った。

「今からホテルのロビーに判子もって行くから、待って」

慌てて着替えて、ロビーに降りた。ロビーと言ってもフロントの前に小ぶりのソファとテーブルのセットが二つあるだけだ。

りで、誰もが絵画や彫刻や陶芸などの趣味に生きています。週一回は、皆が誰かの家に集まり、酒席を開きます。私の釣果はそこで大ご馳走になります。良かったらぜひ我がリゾートハウスにご家族で遊びに来てください」

カラ元気で浮ついた話だった。宮里が横やりを入れた。「天国じゃないか。俺なんかあちゃんのでかい尻に敷かれっぱなしで煎餅みたいな一生で終わりそうだ。宇佐美が羨ましいよ」

拍手と笑いが巻き起こった。が、宇佐美の話の中には寒々とした風が吹いていた。人と人が親密にふれ合う物語に欠けていた。

独り生きる人の自慢話はわびしさを誘い、虐げられた冗談話が幸せを醸し出していた。

「ここのロビーは暗くて寂しいわ。ちよつと外に行きましよう」

美智子はロビーに飛び込んで来るなり言った。

「明日は病院だからアルコールはまずいんだ」

「何よ。少しくらいなら大丈夫よ」

美智子は先だつて歩いて行く。ホテルの前に縄のれんがあった。

「よつ、ミッチーいらつしゃい」

馴染みの店らしかつた。焼酎の水割りがカウンターに並んだ。

乾杯をすると彼女は例の用紙を出すように促す。保証書の文面をほとんど確認もせず、彼女は保証人欄に記入し、判子を押した。

「これでいいでしょ。これで一件落着ね」

南の島の女性はからつとしていた。

「ありがとう。本当に恩に着ます」

宇佐美は彼女に向かって深く頭を下げた。こんな急展開は予想すらできない。

今日一日の経過を考えれば、どんなに感謝しても感謝しきれなかった。

「それにしてもよく即断してくれたね」

「そんなことはないわよ。簡単なことよ。友だちだったら、宮里を除いて、誰でも受けたと思う。宮里も悪くはないのよ。彼の親父が保証人になって破産したからよ。だけど今回は違うからね。借金の保証人じゃないし、亡くなったときの身元引受けなんてね、娘さんがいるんでしょ。本気で探して、事情を話せば、受けてくれる話。だって肉親は娘さんだけだからね。私は全然心配してないわ。それにあなたは簡単に死なないし」

彼女がそこまで他人の家族関係やその先まで読んでいたことに驚愕した。彼女の知的な誠実さと友情が身体に染み渡った。彼女がいつべんに好きになった。

「快復したらこの日の恩を返したい」

それぞれの人の病名は分からない。病状の軽重も種類も多様らしい。

主治医は外来で受診した久保先生であった。久保先生は思った以上に穏やかで丁寧な人だった。CT検査の結果、間質性肺炎と診断しているがその種類を特定するために病理的検査手術を行うと言った。それは肺のなかの組織の一部を採取して調べることだった。その際に肺の中を洗浄しますという。かなり辛いかもしれないが三十分くらいで終わるので我慢してほしいと笑顔で言う。

その検査手術と洗浄は二日後に行うと宣告された。

久保先生はその検査手術の当日に身内の立会いを求めた。またその検査の結果についての説明に際しても身内が同席するように求めた。

宇佐美は他の人の立会いは無理という事情を話した。先生はあっさり同意。理由は検査手術の危険度が低いからで高い場合は手術の実施が不可能になることもあり得ることだった。

その後、久保先生は何度も病室に顔を出して、何か質問はとか不安な点はあるかとか話しかけてくれた。担当の看護師の石田さんも親切でいつも笑顔を絶やさない気持ちのいい女性だった。

長年一人暮らしの身にとって三食付いて優しくいたわりの言葉をかけてくれる病院生活は快適でさえあった。

「その言葉、忘れないわ」

人にこれほど感謝する気持ちになったのは初めてだった。

「ありがとう。心から」

言葉が続かない。涙がいつのまにか頬を伝った。

「明朝は病院まで送るからホテルのロビーで待っていてね」

水割り一杯飲んだだけでお開きになった。勘定は突出しと水割り一杯分だけだった。

「ミッチーの分は水の氷割りだよ。運転手には焼酎は出さないからね」

大将が笑う。一言余計なことを口走った。

「今日は何か、お二人の再出発の日みたいだな。あの書類はひよっとして、婚姻届かな」

宇佐美は慌てて否定しようとした。

「だったら大将、盛大にお祝いしてよ」

五十年前の大人しい少女は快活な南の島の女傑に変身していた。

入院の朝、美智子は約束どおり来てくれた。病室まで同行してくれた。病室は六人部屋だった。両脇にベッドが三つずつ。入り口から見て、右奥のベッドを与えられた。若い看護師は愛想よく入院生活の庶務事項を説明してくれた。同室の患者に挨拶をする。老人が三人。中年が二人だ。

検査手術と肺洗浄の当日の朝、美智子が来てくれた。その後もたびたび病院に顔を出してくれた美智子は、宇佐美にとって心強い相棒になった。

肺洗浄は先生のいうとおりまさに筆舌に尽くせないほどの苦痛だった。通常空気しか入らない肺のなかに異物が挿入されるわけだから苦しいに決まっている。管の先にミニカメラと組織を捕捉するミニピンセットが付いていてそれが肺の中を動き回る。手術台に手足が固定してなければ逃げ出したに違いない。甚だしい苦しさはあったが洗浄は無事終わった。

翌日には病理検査の結果を教えてくれた。当初診断どおり間質性肺炎ではあるが、その中でも比較的軽度の病態であった。入院治療、二ヶ月の診断だった。

入院してから二週間も過ぎると当初快適にさえ思えた入院生活も苦痛になってきた。制約された変化のない単調な日々だからだ。

単調さを和らげ喜びをもたらしてくれたのは故郷の友人たちだった。クラス会参加者の面々がお見舞いに来てくれたのだ。美智子との親密さは会うたびに深まっていった。命に別状ないと確信してからは娘への連絡の意欲もなくなった。

入院の宣告があつてから最大の喜びの日がやってきた。退院の日が決まった。入院からちょうど二ヶ月と一週間が



経過した日だった。

退院の日、美智子は事情があつて来られなかった。宇佐美は彼女にたいし心からの感謝の言葉をメールした。

久保先生と世話になった看護師に挨拶する。長期間の入院で増えた荷物を背負つて下りのエレベーターに乗る。陽光が降り注ぐ大地に踏み出したとき足が大きくふらついた。そのとき気になる人から返信があつた。

——退院おめでとうございます。本当に良かったですね。

わたしはそれほど感謝されることはしていませんよ。今わたしは娘の住む予定の新居にきています。十日後に迫った挙式のため忙しくしています。夫になる人は優しい人でわたしに那覇に移り住むように勧めてくれますが、なかなか決断ができません。故郷の島が大好きだからです。わたしのほうこそ宇佐美さんには大変お世話になり感謝しています。まだ退院直後ですから充分ご自愛ください。感謝。美智子——

——娘さんのご結婚おめでとうございます。あなたにはまだ恩返しをしていません。宇佐美——

と返信した。彼女からそれへの返信はなかった。

## 6

また静かな一人暮らしが始まった。

玄関先でへたり込んだ。全身の力が脱力して長い時間、座り込んでいた。彼女に何かを言いたかった。今は独りであつても人生のある期間を家族として過ごしたことに礼を言いたかった。

爽やかな秋晴れの日。悲しくても辛くても心残りでも悔しくても日常は巡ってくる。

ページユのズボンに青いシャツと黒のダウンジャケット。グレーの帽子を被る。玄関を開けて外に出る。隣家のドアが開いて祖父母の家に遊びに来ていた五歳ぐらいの女の子が顔を出した。

「おじいちゃん、おはようございます」

笑顔できちんと挨拶をしてくれる。おはようと微笑み返す。気持ちリフレッシュする。

もう一度、メールを読み返す。

『……パパの娘の美帆より』

（おれには娘がいたのだ。これから亡き妻と娘との想い出の場所に行ってみよう）

重たい心が軽やかになった。まるで暗闇のなかに蠟燭の灯を見つけたように。彼は背筋を伸ばして深呼吸をした。

朝起きる。カレンダーに丸印をつける。今日の日を確認する。行動する。その生活リズムは入院生活で乱れてしまったけれど復活させることにする。怠惰な生活に陥ることは避けたかった。

外に出る。強い日差しが病みあがりの身には厳しい。二ヶ月間の入院生活で身体がもとに戻っていない。お隣の奥さんに久しぶりに会って挨拶を交わす。先方は懐かしそうに目を細めて会釈した。退院直後で足元がおぼつかないことなど知る由もない。引き返して家に入った。この一週間は自宅で静養することにした。

娘夫婦と同居して老後を過ごす女性が多い。素直に美智子のこれからの人生の幸せを祈った。

わが人生を揺るがす激震が訪れた。もう何年も音信がなかった娘からのメールだった。こちらのメールアドレスは変わっていないから受信することができた。

——パパご無沙汰してごめんなさい。今日は悲しいお知らせです。ママが亡くなりました。心筋梗塞で突然の他界でした。葬儀は昨日済みました。パパには葬儀が済んでから知らせてというママの遺言を守りました。今はこのことだけをお知らせします。わたしの心も整理できていません。パパの娘の美帆より——

妻が亡くなった。いや元妻がこの世からいなくなった。



内田東良

うちだ とうら

1949年京都生まれ、東京育ち  
大学法学部卒業後、保険会社に  
勤務、リタイア後無職  
小説、脚本の執筆活動開始  
小説受賞歴・第18回長塚節文  
学賞大賞、第22回ゆきのま  
ち幻想文学賞佳作

銀華文学賞 受賞の言葉 内田東良

銀華文学賞には何度か応募してきましたが賞には縁がなく、今回優秀賞の受賞の栄に浴し、嬉しく、感謝します。本賞は中高年の小説家志望者を真摯に応援してくれる文学賞として以前から注目していました。選考委員の方の本賞にたいする選考姿勢とご尽力に敬意を表していました。受賞作品はリタイア直後に熟年離婚となった主人公の生き様を前向きに描いています。受賞を契機に今後も小説執筆に一層努力していく所存です。